
遊戯王ブレイブ

アルファド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王ブレイブ

【Nコード】

N9252X

【作者名】

アルファド

【あらすじ】

主人公 大和遊夜は気付くと有名漫画の世界の一つ、遊戯王の世界にいた。

王様ことアテムとその友人である城之内克也を尊敬し、元の世界ではもう一人の克也と呼ばれるほどファンデッキとギャンブルデッキを使っていた。彼は十代たちが通ったデュエル・アカデミアに入学するが、そこには十代たちが卒業した後だった。原作知識が半分以上使えなくなった彼は……？

基本的にオリカは使用しませんが、ギャンブルを多くしますのでそ

こは作者が実際に行なっています。

さらに主人公の大和遊夜君はアテムさんと戦ったパンドラと同じくイカサマをする時があります。決闘者として相応しくない少年ですが、人間としては善良な少年です。よろしくお願いします。

序章 レッドアイズと大和遊夜（前書き）

私ことアルファドはこちらの分野で初めて投稿するものですので、いたしからぬ点がありましたら教えてください。また、モンスターによつては表現が過激になる恐れがあるのでご了承ください。他にも、深く原作知識やルールを知りえていない点もあるので、間違いがあつた場合は教えていただけるとありがたいです。

そして、基本的にオリカは使用しませんが、ギャンブルを多くしますのでそこは作者が実際に行なっています。

さらに主人公の大和遊夜君はアテムさんと戦ったパンドラと同じくイカサマをする時があります。決闘者として相応しくない少年ですが、人間としては善良な少年です。

上記の事をご理解のうえ、宜しく願います。それでは、どうぞ。

序章 レッドアイズと大和遊夜

序章 レッドアイズと大和遊夜

俺は目覚めた。生きている事に、ありがたみを感じたのは今回で二度目だ。

起き上がると最初に感じたのは薬品の匂い。次に一面真っ白な部屋にいる事を確認し、再び寝転がる。

俺はトラックに思いっきりはねられた、だからこんな状態だ。個人的には包帯グルグル巻きで昏睡状態でいると思っていただけだな……。

そこで俺は違和感に気付いた。何で体がすんなりと動くのだと……。

過去に友人がひかれた時、直撃をしなかったのにその友人は足が大変な状態にあった。

なのに今の俺ときたら……体は普通に動くし、眠気があるくらいで特に異常があるとは思えなかった。

まあいいや。と適当に流したその時に、病室の扉がスライドして一人の女性が入ってきた。

外国の血が流れているのかその髪は白で、サファイアのような宝石の眼は俺を真っ直ぐと見据え、白を基調とした青いブレザーをまとっている。

俺の第一印象はやっぱりこうだ、美しい。

その白い華奢な俺の頬の前にやってきた、何だこの胸の高鳴りは？
そして何だこの懐かしい感覚は。

「まったく……アカデミアの筆記試験の前にぶっ倒れているんじゃないわよ……！」

そして俺は思いつきり床に叩きつけられた。痛い……というか何ですか、その女性のイメージを覆す腕力は？

「ほらぶっ倒れてないで退院するわよ。お父様やお母様が許しても、私が許さないから」

容赦なく腕を引っ張られて、看護師さんをことごとく回避して、俺はタクシーに放り込まれると一撃を喰らって気絶させられた。

な〜んか引き摺られているな〜、と夢うつつに感じていたら我が家と称して自宅に来ていた。

何だろう、この理不尽な風当たりは。天国に行ってしまった美優姉さんに、助けてと言いたい気分だ。

そんな所で俺こと大和^{やまと} 遊夜^{ゆうや}は思い出した、あの人美優姉さんに似ていないか？

俺の姉 大和^{やまと} 美優^{みゆ}は六歳の夏に溺れている俺を助けようとして、犠牲となった家族だ。白い髪と青い眼が特徴的な姉であつたと、今でも覚えている。

そして同時に美優姉さんが亡くなってから俺にシスコンと言う属性が付いたのだ。

ガタガタ階段を通り、部屋に押し込まれてから、死にそんな声で言う。

「アンタ誰ですか……？」

すると冷酷に、荒野に咲く一厘の花を踏み潰すような目で、確かに教えてくれた。

「この私にアンタ呼ばわりなんてふざけんじゃない！！ 私の事は美優姉様と言いなさいと言ってるでしょ！！」

と、渾身の蹴りで吹っ飛ばされて、その衝撃でテレビの電源が切れた。

そこには黒いコートを身に着けた親父の姿がいた。そして、その前には俺が過去に使った事があるカード、フェルグランドドラゴンが前にいた。

そして親父は攻撃と雄叫び、相手プレイヤーのライフが0と表示されて終了した。

はてしなく嫌な予感しか無いんですけど……。俺は真相を確かめるべく、パソコンの電源をつけて確認する。

迷走する事15分、外を歩く事20分、そして自分の部屋を見渡してこの世界が30パーセント分かった気がした。

ここは俺の知っている世界じゃないと言う事だ、そこらじゅうにカード（デュエルモンスターズ）が散らばるように存在する。

俺のデッキらしきものを見つけたが……正直、これで戦うのは危険すぎとか言えなかった。

レベル4のモンスターのほとんどが通常モンスターで平均攻撃力が1600。酷すぎるとしか言えなかった。

改造できるところは改造して、俺は美優さんの目を盗んで町に出ていた。

「さてと持てるだけの金は持ったけど……どうしようかな？」

アンティイルールでカードを手に入れる、という方法もあるけど偶に後味が悪い時があると思うしなあ……。

例えるならその人が大事にしているカードを賭けて貰うのは気が引ける。まあ、こいつがいれば大丈夫かな。

デッキのトップにレッドアイズをわざわざ見せ付けるように持って歩く俺、これで確実に注目の的になる事は間違いない。

誘い込むように路地裏に入ると、ヤンキーというのかカードギャングのような連中がいた。

「よお兄ちゃん。良いカード持ってるじゃないか？ レッドアイズを持ってるなんてどこの坊ちゃんだあ？」

不細工な顔を近づけてくる一人。もちろんそれはご遠慮頂きたいので、

「もしかしてこの子が欲しいの？　だったらアンティールでなら良いよ、強いのを持っていて向かってくるって事は実力者なんですよ？」

嗤い始めるギャング共。不快極まりなく最悪だ、しかもこのドラゴンが最強ではない。ブリューナやシューティング・スターなどが恐ろしい部類の一つだと思っし。

「俺が負けたらこのデッキをくれてやるよ。まあ、そんな事は有り得ないけどな」

「デュエルはやってみたいと分からないよ。デュエリスト・キングの遊戯さんも言ってたでしょ？」

正確にはアテムさんだと思う。ああ、できることなら戦ってみたいなー。

お互いにデュエルディスクを構えて決闘の声を上げる。

「「^{デュエル}決闘！！」」

遊夜LP4000

ギャングLP4000

「先行は俺のターンだ、ドロー！！」

不気味に手札を嘗め回すように探るギャング。そして一枚のカードに手をかける、

「俺は地獄の戦士を攻撃表示で召喚だ！！　そしてデーモンの斧をヘル・ソルジャー装備し攻撃力を2400にするぜ！！」

決まったと言わんばかりにカッコつけるギャングA。そして俺は憂鬱そうな顔をする、

「どうした？　もう後は引けねーぜ、さっさと降参サレンダーしな。そうすりゃ痛い目には遭わないぜ」

「そんな無駄口を叩くとはターンエンドなのですか？」

苦々しい舌打ちをしたギャングさん。どうやらエンドみたいだな。

「僕のターンです。黒竜の雛を召喚して、さっそく効果を使いましてレッドアイズ・ブラックドラゴンを特殊召喚します」

キタキタキターーーー！！　と錯乱状態でもなったのかと思うほど俺は興奮してしまった。

黒くも煌く鱗、青眼の白龍に劣らない真紅の眼、そして漆黒の一對の翼は夜よりも深い……やっぱり、かっこいい……。

って落ち着け俺！！　オタク属性丸出しじゃないか、でも……城内内さんとタッグを組んでコイツを二対並べてみたい。

俺の気持ちに呼応するようにレッドアイズが咆え始めた。スゲー、

海馬コーポレーションのソリッド・ビジョンは世界一だな。

「さらに僕は魔法カード黒・炎・弾を発動して2400ポイント、アナタに効果ダメージを与える代わりに、このターンにコイツは攻撃できない……」

レッドアイズが口開くと真紅の球体が渦巻き始めた。恐らくあれが黒炎弾かな？

「やれ、レッドアイズよ！！ 黒炎弾だ！！」

そして俺はカードを二枚伏せてターンを終了した。さっそく黒炎弾がお見舞いできたよ、さすが玄人とまでは言わないけど中級者がやつても変わるもんだな。

カードギャングの場……ヘル・ソルジャー地獄の戦士（デーモンの斧のみ装備）だけ。

大和遊夜の場……レッドアイズ・ブラックドラゴンと伏せカード二枚。

「先制出来たらからって調子にのんじゃねえぞ！！」

それはどの対戦でも大事な事でしょ、俺は頭を抱えながら心の中でツツコミを入れた。

ギャングは、ドロー！！ と叫びながらヘル・ソルジャー地獄の戦士に凶暴化の仮面を装備させた。

「これでお前の切り札はお終いだ。地獄の戦士で攻撃だ！！」

「まだ始まったばかりですよ。それにですね、伏せカードは警戒しましょうね、どうかのお兄さん」

遊夜は指を鳴らして伏せカードを発動した。

「では伏せカードをオープンします。ヒーロー見参です、これは相手の攻撃宣言時に使えるカードです。相手に自分の手札を一枚選んでもらい、それが召還できるカードなら僕の方に現れます。でも手札が一枚しか無い為に、このカードを特殊召喚します現れるレッドアイズ・ブラックドラゴン！！」

証明するようにカードを見せ付ける俺。こういう時にヒーロー見参って良いですね？ ちなみに真紅眼の黒竜のことですが、

元のデッキに合計三枚も入っていたからビックリしたけど……。だってこの世界で、レッドアイズって数十万ぐらいするんだろ。

あの竜崎なんか全財産を使ったと言っていたしな、本当にデュアルデッキじゃないとコイツは使いづらい。

「ただ、だが地獄の戦士の攻撃は防げねえ、結局は終わりだ！！」

「誰も一枚だけ発動とは言ってますよ、さらに伏せカード発動モンスターBOX。コイツはコイントスをして予想が当たればアナタの攻撃モンスターの攻撃力は0となります。さあ舞えコインよ」

手元に所持していた五百円玉を高らかに持って、植物が書かれた方（裏）を選択した俺。全員がゴクリと息を呑む。

俺の親指に弾かれたコインはヒュンヒュンと音を立てながら、俺の対戦者 ギャングさんの前に落ちた。今こそ俺の実力が公開される、

「うそだろ……何で当たってんだよ、てめえーイカサマしただろ！」

当たったんだ。自分でも綺麗に決まるとはね……、いつもなら最初の一回はミスってるんだけど。

「何度やっても良いですよ。次は三回して二回当てれば効果成立でも良いですよ、何ならアナタがコインを投げますか？」

迷う事無く頷いたギャング。今日の俺の運は最高潮だ、今それが分かった。

「最初の一回目が表で、残りは全部裏でお願いします」

再びコインが空中で舞い始めた、先程まで騒いでいた連中が嘘のように黙っている。まあこれが決まれば俺の勝ちだしな。

コンクリートに弾かれたコインが示したのは、

「……何でだ……何で出ちまうんだよ……」

表だった。周りの連中に緊張が走り始めた、そろそろ揺さ振ってみようかな。

「まず一回目の成功ですね、次当たれば僕の勝ちですね。どんな力

「ドを貰いましょうか、気になりますねー」

あえて顔だけが前に出るように近づけさせる。これが腰を抜かした相手に有効だと、不良の先輩が語っていたことだ。

二回目の時にギャングの手が震えている事に気付いた。相手が暴力を行使するなら、俺は運と頭を使うのだ。脳がかなり疲れるけど……。

「あ、そくだー!!」

いきなり俺が大声で言ったからギャングはコインを落としてしま
う。

「ここで綺麗に決まっても面白くありませんよねえ。僕は先程、裏
としましたが、表にします」

「は、はつたりを言うんじゃない!! これも仕組んでんだろ!!」

「はは、人間。ここまで追い詰められるとそんな事を口走ってしま
うのか……、コインは真実しか語りませんよ」

闇バクラさんの台詞を一部だけ使ってしまったよ。それに俺はコ
インを都合よく当てる方法なんて知らない。

落下するコイン。下手、という感じに地獄の戦士の足元に落ちた。
ヘル・ソルジャー

それを奴の仲間が見に行った。すると大きく眼を見開いて、尻餅
をついた。

「裏だ……」

そんな呟きが周りを怖気させる。元々特技が強運しか無いんだけどね……。

するとギャングさんは狂気な顔で「お前、何て言っただ！！」と叫んでいる。

もし俺がそのまま裏を宣言していた時のビジョンが離れないのだから。何だかこれ良いな……。

「言いましたよね、コインは真実しか語らないと……。さあ三回目のコイントスを行ってください」

ギャングは絶叫しコインを地面に向かって叩きつけた。これを見た瞬間に俺は確信した。

もしかしたら外れるかも……。その理由は単に相手がコイントスをする時に、あんな感じにやられた場合に俺の強運は外れることが多く……。

「やった表だ……、これで地獄の戦士の攻撃は有効だあああ！！」
ヘル・ソルジャー

地獄の戦士の両断にレッドアイズ・ブラックドラゴンは口で受け止めるが……徐々にひび割れて行くように撃破された。

まさか調子になった結果がこれだ。やっぱり己惚れたら、やられるな。
はたふし

武術を習っていた時に『自分を信じられる事は良い事だ。だが、

自信過剰になってしまつては意味がないぞ』と先生に言われてしまった。

今のが良い例と言ふべきなのか？ どちらにしろ大変な事には間違いない……このLP4000制なら。

遊夜LP3000

ギャングLP1600

場にはレッドアイズが一体……、伏せカードはお互いに無し。だが相手には攻撃力3400の地獄の戦士ヘル・ソルジャー（デーモンの斧と凶暴化の仮面を装備）がいる。

「どうしたあ、さっきまでの威勢はどこへ行つた？ グハハハハハハハハ！」

全く……形勢逆転した瞬間に鼻が伸びるつてうざったいな。チートドローでもしてやろうか？ この運なら可能かもしれないしな。

俺が思いつく限り、このデッキには逆転できるカードがある。だがその殆どが、ギャンブルなんだよな。

ここで黒・炎・弾が来てくれると良いんだけどな……、

「僕のターン、ドロー！！ モンスターBOXの維持コストは払わない」

今引いたカードを確認すると、俺は迷う事無くモンスターをセツ

トし、レッドアイズを守備にしてターンを終了した。

本当に一か八かの賭け勝負させる気か？　そして俺のデッキに精霊さんはいないのか、いたら今すぐこの怒りをぶちまけたい。

「モンスターを裏側で出すって事は、攻撃する余裕も無いか？　俺はメテオ・ストライクを装備させてレッドアイズに攻撃だ、砕け散れ！！」

二体目の相棒は黒炎弾を放つが剣に斬り落されて、胴体を斜め四十五度、真っ直ぐ両断された。

遊夜LP2600

ギャングLP1600

くそ、LPが磨り減るように削られていく。だがあのカードを引ければ確実に勝てるのだ、あの罨カードを引ければ。

これが最後のドローだ……。こいつが奪われる切欠を作ったのは俺だ、引くしかない。

「ドロおおおおおおお！！！！　強欲の壺を発動し、自分は手札を二枚引く！！」

「往生際の悪い坊ちゃんだなあ、おい！！」

「ドロー！！」

闇雲に引いた俺の手札を確認する。

一枚は思い出のブランコ……. してもう一枚が漫画で城之内克也を勝利へと導いたカード、確立変動。

「俺はカードを一枚伏せてターン終了だ!!」

やばっ、素が出ちゃった。嫌な予感がするなか、周りを確認すると高笑いしている連中が大勢いた。

「何言つてんだコイツ? カッコつけちゃってよお、お前の負けは決定したようなもんだぜ?」

そうだそうだ、と喚く^{わめ}うるさいギャラリィ。逆だよ、俺の勝ちが決まったんだよ。

そしてギャングのターンになる。

「ククク、俺はブラッド・サッカーを召喚して攻撃!! これでレッドアイズは俺のモノだ!!」

吸血鬼の下僕が俺のリバースモンスターに突進し始めた。確かにこれが通れば俺の負けで、手元からレッドアイズが消え失せるだろう。

しかし決闘と言うものは本当に意味不明な事もある。イカサマをすれば終盤でカードの噛み合いが悪くなり、結果的に負けてしまう。

そして、カードを大切にしている人間はカードが助けてくれる。だからこそ、俺はコイツに賭ける。

「その瞬間にリバーズ効果を発動！！ 我^わが前^{まえ}に時空^{じくう}の彼方^{かなた}より現^{あらわ}れん、時の魔術師よ！！」

俺の前に現れたのは時を司る奇術師であり、克也さんと遊戯さんの友情の証とも言えるカード。

コイツを引き当てた時に、本当に憂鬱な気分になったよ。というか俺って今、何歳って事になってるんだ？

俺は高校生になってやっと落ち着いていた時なのに……アカデミアの入学って中学三年生だよな。

死にそんな感じで入るところ、ギャングは驚きのあまりに目を見開き「そ、そいつは！！」と声を荒げていた。

「効果を知っているなら有難い。コイントスを行い、当たればアナタのモンスターを壊滅させてその総合攻撃力の半分ダメージ。逆に外れたら俺の場のカードを壊滅させて総合攻撃力分ダメージ！！」

一拍置いて俺は深呼吸をする。俺の運なら勝てる、この世界ならチートドローは誰にも有り得る。よし、俺はコインを親指に構える。

「時の魔術師よ、この俺に奇跡を見せてくれ——！！ 俺は表を選択、コインよ勝負を決める為に、舞え！！」

スローモーションにクルクルと縦回転するコイン。チャリーンと金属音が響き、大地の上でコインが踊る。

ゆっくりと摩擦と言う作用で止まり始める。ギャングがそれを確

認する、結果は――

「お前の負けだ。裏だ」

ギャングは確かに無実を証明するが如く、単純に見せた。だが、これはデイスティー。俺の勝ちが決まっている。

「残念だが伏せカードオープン、確立変動！！これは、コイントスやダイスロールなどをやり直すことができる。しかし、一度当たった所にはならない」

確立変動（漫画カード）……罫カード。コイントスやダイスロールなどをやり直すことができる。しかし、一度当たった目にはならない。

こつちの世界には狂戦士バーサーカー・ソウルの魂や最強の神々、などがある為に俺はある意味で言えば動きやすかった。

「そんなの卑怯だ！！ふざけんじゃねえ！！」

「カードに文句があるなら、デュエルモンスターの創造主（ペガススさんや遊戯王の神）に言えば良いでしょう？とりあえず……タイム・マシン時の魔術は有効！！消え失せるモンスター共！！」

時空の狭間に敵のモンスターを引き込んで、時の魔術師は墓地にいつてしまった。すまないな、時の魔術師……。

遊夜LP2600
ギャングLP350

「クソヤロウ！！ カードを一枚伏せてターンエンドだあ！！」

お互いにモンスターはゼロ、ギャングの場に一枚の伏せカードだけ。

確信した勝利を捻じ曲げられた気分はさぞ不快であろう。しかし、あつちの世界じゃなこのコンボが成立する前にトラップ・ジャマーや天罰で無効化されてるからね。

もしアンケートをすれば、きっと俺の想像を超えるコンボで甚振りつくされるだろうな。実際にやってみようかな（まだ保留ですが）。

「アナタの終わりはこのカードが告げてくれます。魔法カード、思いの出のブランコを発動する！！ これは墓地に眠る通常モンスターを蘇らせてくれる切り札です」

まあ、エンドフェイズには墓地に送られるんだっけ？ だが召還さえできれば問題ない。

俺のデュエルディスクから龍の雄叫びが響き始める。さあ我が前に君臨せよ、我がデッキの切り札！！

「レッドアイズ・ブラックドラゴンを特殊召喚！！ 戦闘フェイズ、プレイヤーに攻撃！！ 黒炎弾！！」

紅き息吹と共に激しい爆音と突風が発生する。くっ、海馬社長の実力が恐ろしい、本当に思うよ。

KONAMIさん、レッドアイズ・アルティメット・ドラゴンを製作してくれ！！理由は、この前に青目の白龍を最強と言う友人に復讐したいからだあああああ！！

俺はそう心の中で叫びとおし、勝利をもぎ取った。

あ後は本当に大変でした。デッキ丸ごとはさすがに気が引けたので、欲しいカードだけ貰って。次の獲物を探していた時です。

次の決闘の為、デッキを調整する為にカードショップに行ったら美優姉さんとバッタリ会ってしまい、笑顔で天昇する事に。

そして部屋に監禁されて、なんか見たことがあるデッキホルダーを見つけてしまう。そのデッキトップは向こうの世界でお気に入りを使っていた、神禽王アレクトール。

もしもこのデッキを見つけていたら手間が掛からずに勝てたかも知れないと思うと、無性に泣きたくなった。

一応、後日の筆記テストには合格し、受講NO・13を手に入れた。本当に最悪だ。

彼が相手にした連中はこの町でも問題なっていたほどである。し

かし、カードギャング狩りの美優の出現によって朽ちる方向にあったのだが、彼女がデュエル・アカデミアに入学した事を知った連中は再び活動し始めた。

だが、カードギャング狩りをする人間は他にもいた。これは大和遊夜がギャングに勝ったすぐ後の事だ。彼が路地裏に行つたのを見ていた少女がいたのだ。

彼女は隠れてその瞬間を見ていた。レアカードをあんな感じに使うとは、決闘者の風上に置けない人間と感じたからだ。

パーカーで顔を隠して連中の中に紛れて決闘を黙認していた。

実際にあそこまでのギャングブルカードの的中率は少女の実力を持つてしても――まず無理だ。それこそイカサマしているしか思えない。

だが彼女の相棒はそれを否定した。その理由はレッドアイズがそう叫んだ、そうなのだ。

「（どうした方が良いと思う、彼はもう負けそうだけど？）」

『大丈夫ってレッドアイズが言ってる。だからまだ手を出しちゃ駄目』

そうしていたら彼はタイム・マジックを成功させただけでなく、切り札を召還して勝利を掴んではないか。

これに至っては少女も感嘆の息を漏らした。もしかしたら美優先輩以外で手応えのある決闘者がまだ存在する事に喜んだのだ。

『アカデミアに彼がいるといいね』

「そうじゃないと私が面白くないわよ……。それにアカデミアはアカデミアで、実力者がいるはずでしょ。お兄さん達もいるんだし……」

少女の一言に苦笑いをする精霊。冬休みに帰って来た彼ら（少女の兄たち）に呆気なく敗北してしまったからだ。

一応、少女は“カード狩りの死神”という通り名があるほどののだが……。その実力でも上はいる、という事だった。

『なんだかナツチーの中学生活って、微妙に灰色に成りかけてたよねー……』

少女の胸にグサリ！　と言葉の針が刺さった。

精霊の言う通り容姿と声色で男子と勘違いされたり、デュエルが強いから嫉妬を買いまくったり、色々な目に遭った。

だけど、アカデミアは決闘者の養成施設だ。そこに行くだけでも大変だから、前までに会った嫌な人間とは恐らく会う事は無いだろう。

「高校生活は……楽しくなるかな」

少女は小さく呟くように話の幕を一つ閉じた。

序章 レッドアイズと大和遊夜（後書き）

遊夜君のデッキは、私のデッキなのですがギャンブルカードを数多く私は持っていないので、誰か情報提供をして頂けるとありがたいです。

第一話 お姉さんの実力

第一話 お姉さんの実力

俺が元の世界で持っていたカードたちが、マイルームにあったから良かったけど……。これが無かったら、俺はきっと崖から海に向かって落ちていると考えている。それに、何で俺らの世界のカードがあっただ？ シンクロとかエクシーズとかもあったし。奇奇怪怪というのか、なんというのか。そんな思いでサブデッキを作った。

デッキ名はデイスペルデッキ（無効化デッキ）だ。あまり面倒事に巻き込まれないように強くも無く、弱くも無いデッキにした。

唯一の問題は俺の実力は、この世界でどれ程であるか？ それを除けば問題ない。そして俺は美優さんに決闘を申し込んだ。

二次試験の事を理由にしたのは大正解だったよ。

未だに美優姉さんと言わない理由は、まだ信じられない、それだけである。そして彼女はデュエル・アカデミアの友人さんと呼んできた。

「遊夜、弟だからって手加減はしないわよ」

そんな物はいらない、むしろ邪魔なだけだ。

「本気で来て下さい。じゃないとこのデッキの本質が分かりません」

そう、と冷酷な声で答える美優さん。全然、名前と対照的な性格

じゃん。どうせなら冷酷の冷を使って冷華にして欲しかった。

「決闘」

遊夜LP4000

美優LP4000

デュエルディスクが開き、ライフ4000と表示される。

「先行は私からドロ、スピア・ドラゴンを召喚!!」

口ばしが長い竜が羽ばたきなら出現する。攻撃力は1900、貫通能力が厄介なところか……、しかし問題無い。

「カードを三枚伏せてターン終了」

そういえばアニメを見てて思ったけど、カードを二枚伏せるって皆やっているよね。俺もしないといけないのか？

疑問を抱きながらドロする。引いたのはアックス・ドラゴニート。こいつなら出来る。

「俺はアックス・ドラゴニートを攻撃表示で召喚、さらに愚鈍の斧を装備!!」

斧を持った戦士のような竜が召喚され、いかにも重そうな銀の斧にチェンジする。

「愚鈍の斧の効果は装備モンスターの効果を無効化する代わりに攻撃力を1000ポイントアップ、代わりにコントローラーはスタンバイフェイズ時に500のダメージを受けます」

「ほほ、弟君はパワーデッキですか？」

今言ったのは美優さんの同級生の陽子さん。実力は不明だ（ちなみに、俺が使っているデュエルディスクは陽子さんのだ）。

それはともかく、アックス・ドラゴニート攻撃力は3000！
！ 十分過ぎる程だ。

「アックス・ドラゴニートで攻撃！！ スピア・ドラゴンを両断せよ」

「トラップカード発動、マジック・シリンダー魔法の筒！！ 攻撃を無効にし、その攻撃力分ダメージを受けなさい」

マジック・シリンダー魔法の筒からアックス・ドラゴニートの攻撃が俺に向かって飛んできた。受ける受けないカンケイ無しにヤベーよ。

しかし、俺はそのまま受けさせていただく。一応、ダメージを受けるアクションを、おほん。

「ぐはっ！！ 三枚カードを伏せてターン終了」

大和美優……伏せカード二枚、スピア・ドラゴン。手札二枚。
大和遊夜……伏せカード三枚、アックス・ドラゴニート愚鈍の

斧 装備状態。一枚。

デッキからカードを引いた美優さん。頬が綻んでいるように見えるのは気のせいかな？

「リバーズカード、オープン。サンダー・ブレイク！！ 手札を一枚墓地に送り、フィールド上のカードを一枚破壊する。私はアックス・ドラゴニユートを破壊する」

んな事させてたまるか！！ ちよつくら攻撃されてもヤバイのに。

「速攻魔法、神秘の中華鍋を発動。自分フィールド上に存在するモンスターを生贄にし攻撃力が守備力分、回復する」

アックス・ドラニユートが鍋にグツグツ煮込まれて、俺のライフが4000まで回復した。

しかし美優さんは止まらない。今度は伏せていた死者蘇生を発動してきた。

「私は墓地に眠るサファイア・ドラゴンを特殊召喚。二体を生贄ささげ現れなさい、光と闇の境界線を舞う竜よ！！」

俺の前に現れたのは、右半身が白で左半身が黒のドラゴン。厄介な奴が出てきやつた。

「エースモンスターよ。ライトアンドダークネス・ドラゴン。効果は攻守を500ポイント下げて相手の発動した魔法・罠・モンスター効果を無効化する、知ってるでしょ」

知ってるなにも……あつちの世界の大会で俺はこのドラゴンに甚振られた事があるつつの……！　だけど、もう対策は出来ているんだよね。

フフフ、自然とにやけてしまう。その姿を見て哀れむ美優さん、そんな目で見ないで欲しい。

美優さんが光と闇の竜に攻撃を指示する。ライトアンドダークネス・ドラゴンが口を開き、ブレスが来る。

「させません。攻撃の無力化を発動……！」

「攻守を下げて効果を無効化……！　残念だったわね」

今にも俺を部屋に監禁させようとしている美優さん。しかし残念なのはそちらだ。

「罠カード、万能地雷グレイモヤを発動させる。ライトアンドダークネス・ドラゴンの攻撃は不成立、そして同一チェインでは効果は使えない。ライトアンドダークネス・ドラゴンは墓地に送られる」

光と闇の竜は地雷を踏み、消え失せた。ああ、死ぬかと思った……グレイモヤが無かったら俺は負けていただろう。

小さく歯噛みするエースモンスターがやられた時の悔しさは分かるよ。俺も小さい頃は地団駄を踏んでたから。

「光と闇の竜の効果でサファイアドラゴンを蘇生して、カードを一枚伏せターン終了よ」

大和美優……サファイア・ドラゴン、伏せカード一枚。
大和遊夜……伏せカード一枚のみ。手札一枚。

俺が主人公ならここで良いカードを引くだろう。何だか、デッキが遠く感じられる……そこまで重要な決闘じゃないのに。

「俺のターン、ドロー！！俺は強欲な壺を発動し二枚ドロー！！更に天使の施しを発動し、三枚引き二枚捨て、強欲の壺を再び発動！！」

天使の施しで来た絶対服従魔人とゴブリン突撃部隊を墓地を送る。

手札に残ったのはハリケーン、地割れ、愚鈍の斧、サンダー・ブレイク。ここで使うのは、

「俺はハリケーンを発動、伏せられているお互いのカードを戻す。地割れ発動し、サファイアドラゴンを破壊。そして俺はハリケーンで回収した死者蘇生を発動する、現れよ絶対服従魔人！！」

紅き巨大な魔人がフィールドを威圧する。陽子さんは意外とでも言いたげな顔で、俺を見ている。どこか天上院吹雪みたいだ。

「絶対服従魔人は自分フィールド上にこのカードだけしかなく、手札がゼロではなくては攻撃できない。しかし、俺はコイツを服従させる、俺は絶対服従魔人に愚鈍の斧を装備。これでコイツは攻撃力4500の化け物と化した。美優さんにダイレクトアタック！！」

愚鈍の斧が美優さんを両断し、彼女は悲鳴を上げる。つまり勝ったのだ、これで美優さんのレベルを聞ければVery Good。

ああ……これで十代たちの物語に自分が介入できる。三幻魔や精霊界にダークネスやら色んなバトルが出来る、これがチートという物を初めて使った者の心境なのか？

ガッツポーズをとっていると、拍手をしながら陽子さんが来た。

「おめでとう。アカデミアでもドラゴンクイーンの称号を持つ美優に勝っちゃうなんて……もしかして、美優に勝ったのは今日が初めじゃないの？」

初めてどころか今日が初戦ですけど……、それは言わず俺は別のツッコミを入れる。

「……あの、ドラゴンクイーンって何ですか……？」

「美優から聞いてないの？ 美優の異名だよ、ドラゴンクイーン美優。吹雪さんが言い始めて、学園中に広まり定着したのよ」

俺の中で疑問が生じた。吹雪の登場は三幻魔の鍵を守るところからだよね……えーと、じゃあ今はGXのどこら辺だ？

「あの、すみません。デュエル・アカデミアの実力者を何人が教えてもらえませんか？」

陽子さんは人差し指をあごに当てながら、

「まず剣山先輩でしょ、吹雪さんや、ボクと美優もいるし……とり

あえず沢山いるよ」

どうして明日香や十代に翔の名前が無かったんだ？ それとも俺は彼らが卒業した後に着たのか？

俺は神様が仕組んだと思われるイタズラに嘆き悲しむ。これじゃあ主人公たちと決闘をする事が出来ない。

「チックシヨオオオおおおお！！ これじゃあ武藤遊戯に辿り着く前に、目前が暗い！！」

その時、俺の後ろから拳が降ってきた。振り返ると美優さんが怒りの形相で頭を抱えている。

「遊夜……アンタ、いつの間にそんなレアカードや実力を手に入れたの？ 報告は怠らないように言っただでしょ」

開かれた目は据わっていた。そして、奴隷的な立場なのはどうしてですか？ 俺の心の中で生きている姉の像が一瞬で消え去った。

まあまあ、と陽子さんは美優さんを宥めているが聞く耳を持っていないようだ。ここはその場しのぎの嘘を吐くか。

「カードは遊戯さんと似ている人から貰った、使い方も同じく。次元違いの実力だった」

多少棒読みになってしまったが俺は気にしていない。同じ世界から来た奴はきつとこう言うだろう、勝手に王様を使うんじゃないと。

その後も姉からの説教と、親父やお袋を含めた家族会議を開くそ

うだ。後先が面倒だ……。

そして俺は陽子さんの笑みに気づいていなかった。妖艶に近く、面倒事を持つてくる疫病神のような笑顔に。

「もしもし、先生ですか？　ボクです。今日、ちょっと面白い子を見つけちゃったよ」

少女は自室でデッキを調節しながら首と肩で白い携帯電話を挟みながら、ディーラーのようにカードを捌く。

『一体、どういう事なノーね。説明を入れて欲しいノーね』

「だから金の卵を見つけちゃったの。もしかしたら一年で学園一を狙える雛鳥を……ふふ……」

ゴクリと息を呑んだ相手。その音は電話越しにでも聞こえる。

「デッキも荒い使い方だったけど、三学期には改善されてる思うな。そして、名前は……大和ユウヤ……大和美優の弟です」

その名前に相手は過剰に反応した。

『マ、マ、まさかプロ・デュエリスト。大和龍二さんの息子なノーですか……！？』

大正解と、小さく呟く陽子。彼女はこうやって伏線を張るのは大好きだ。特にそれが男で、それに翻弄される姿を見て喜ぶ。

今回もいつものように罫を仕掛ける。相手は自分にどこまでついて来られるのか、調べるように。

「先生もその目に焼き付けると良いよ。試験デッキじゃ、彼の限界は知る事は多分出来ないよ、クロノス先生」

彼女は電話を切ると、満月を見上げながら色んな戦略を立てる。

それはデュエリストとして喜んでいるのか？ 女として喜んでいるのか？ 陽子は自分自身の気持ちも分からない。

だけど、一つだけは確実に分かる。

「……ボクが新しい強者の出現を望んでいる……か……」

新しい太陽を昇るのを待つように、己と対等に並ぶ敵の出現に震えるように、小さい頃の情熱のように、彼女は大和遊夜の出現を待っている。

「入学したらボクが遊んであげるよ。スフィア達と君がどう踊るのかを楽しみにしているよ、遊夜君」

彼女のベッドにはThe アトモスフィアのカードとユベルが置かれていた。

第二話 アカデミア二次試験 重なる道（前書き）

友人からの報告で感想の設定を間違えてユーザーしか受け付けなくなっている事に気付きました。本当に、申し訳ございません。
今回は副主人公の登場とヒロインを公開します。

第二話 アカデミア二次試験 重なる道

第二話 アカデミア二次試験 重なる道

俺はこの姉の下でやって行けるのかと、人生の不安を抱えた人間のように悩んでいた。

筆記試験に合格し受講NO・13を取ったのは良いが、これは誰が仕組んだのだろう？俺の前にはクロノスが、ノーねと叫びながら突っ立っている。

もちろんデュエルディスクを装備してだ。観客たちはクロノス直々に出て来た事に驚いているが、俺は逆にガツカリだ。

だってこれで注目間違いないじゃねえか！！美優さんは試験官の人達と何か密談してるし、陽子さんも参加していた。

昨日の決闘の後に俺は、デッキを改造して今度はマスター・ヒュペリオンのデッキを作った。

全く、無効化デッキがあそこまでの実力なら俺はもつと本気を出さなければなくなる。あっちの世界の実力者たちが羨ましいね。

「ボンジュール！！君の実力は聞いてるノーね。よって本気で行くノーね」

「誰から聞いたんですか？」

忌々しげに聞く俺にクロノスは簡単に答えてくれた。

「アカデミアの生徒なノーね。ほら、あっちにいるノーね」

指先にはもちろん美優さんと陽子さんがいて、陽子さんは俺の視線に気づいてウインクをする。

あの人が元凶かあああああ！！ クソッ、俺が隙を見せたら次はどんな風に遊ぶか悩んでいる顔だ。俺は拳ながらクロノスに意識を戻す。

「先生の本気をしっかりと受け止めて戦わせていただきます」

「「決闘！！」」

大和遊夜LP4000

クロノス教諭LP4000

「先行は俺のターン。俺はフィールド魔法、天空の聖域を発動します。これにより天使族の戦闘により受けるダメージはゼロになります。そして奇跡の代行者アースを攻撃表示で召喚します」

天空に浮かぶ城に白き天使が舞い降りる、美しい光景であるが効果は恐ろしいモンスターを呼ぶ効果を持つ。

「アースの効果を発動。通常ならアースを除く『代行者』のカードをデッキから手札に加えるのですが……天空の聖域がある時、マスター・ヒュペリオンを代わりに加えることが出来ます。そして俺は、ターン終了です」

クロノスがカードを引いて、僅かにニヤケる。これは十代の時に
見せた笑みに似ているな。

「私はカードを二枚伏せて大嵐を発動するノーね!!」

ソリッドビジョンの風が舞い伏せられている二枚と、天空の聖域
が破壊される。

俺の予想が正しければあれは、

「伏せていた二枚は黄金の邪神像のカードなノーね。よって邪神ト
ークンを二体、特殊召喚なノーね」

やつぱりだった!! ああもうチクショウ。どうせこの次はゴー
レムを召還するんだろ?

「二体を生贄ー二、古代の機械巨人を召喚し攻撃なノーね」

予想的中で髪の毛を掻き耨る俺。アースの攻撃力は1000だ、
絶対に大ダメージだろ。

2000の苦しみを受けながら出し惜しみに悔しく思う。俺の残
りライフは半分。クソウ、他の人間なら爪を簡単に隠しているのに
……自分が情けない。

「ウォーターシは、1000ライフ支払って押収を発動するノーね。押
収の効果は相手の手札を見て、捨てさせる効果を持つノーね」

俺の手札がクロノスに公開される。マスター・ヒュペリオン、神

の居城・ヴァルハラ、ヘカテリス、オネスト、創造の代行者ヴィーナス。

確か遊城十代はバカにされていたな。クロノスは俺の手札を中からマスター・ヒュペリオンを墓地に送った。

妥当と言えるね。マスター・ヒュペリオンは墓地にいる天使族・光属性のモンスターを除外して場のカード一枚を消し去る効果を持つからな。

クロノス教諭LP3000 古代の機械巨人のみ。
大和遊夜LP2000 場のカード無し。

「こんなレアカードを君はどうやって手に入れたノーね？ 学生が持つてるとは思えないノーね」

それは昨日、家族会議で何度も言われたよ。親父なんか怒っている雰囲気は無いものの、邪眼で睨まれたように俺は動けなかったぞ。

「貴方が勝てば教えます。俺のターン、ドロー」

来たのは死者転生、俺にとって都合の良いカードとも言えよう。

「俺は死者転生を発動します。これは手札のカードと墓地のモンスターを入れ替えます……そして、神の居城・ヴァルハラ発動。コイツは俺の場にモンスターが存在しないとき、手札の天使族を呼び出します。現れよ、創造の代行者ヴィーナス。そして墓地の代行者であるアースを除外して現れよマスター・ヒュペリオン……！」

「まずいノーね!!」

炎のような灯りを纏いこのデッキのエースモンスターが現れる。
観客は効果を知りたいだろうが、俺は使わない。

「俺は創造の代行者ヴィーナスで古代の機械巨人に攻撃!! もちろん、ここでオネストを捨てて効果発動!! 光属性モンスターの戦闘の時にオネストを捨てた場合、その光属性モンスターはバトルするモンスターの攻撃力分アップ!! マスター・ヒュペリオンも行け、クロノス教諭のライフを0にしる!!」

神に仕えし天使達は最高の攻撃力を持って古代の機械巨人を破壊しつくした。

それも……マスター・ヒュペリオンは裁きの炎で灰になるまで攻撃して、ヴィーナスは光の放射能で機械をぶっ壊した。

教諭はペペロンチーが、どうか言っている。そして俺は適当に、アリガトウゴザイマシタ、と言って置いた。

たくっ、八割の実力でやっていく破目になるとはな……。他のプレイヤーなら1ターンで勝て奴もいるだろう、俺はそういう実力者が羨ましいぜ。

後は強行突破で試験官の先生たちがいる場所に入った、何人かに止められまくったが美優さん達の名前を出したら、しぶしぶ通してくれた。

ずかずかと陽子さんの前に仁王立ちする俺。陽子さんは楽しげに

俺を見つめて「おめでとう」と言った。

「何で俺の事を言っただんですか、陽子さんが原因ですよね？」

「あやゝバレちゃった、そうボクが言っただよ。なんたって美優を倒したんだからね、カメレオンのように隠れているのは卑怯だよ」

「だから言っただんですか？」

陽子さんは、その通り、と言った。この人は危険分子だな。“不幸を呼ぶ美少女”とも言えるのだろう。

これからは陽子さんの前で俺の弱点や、元の世界の事を滑らすことが出来なくなった。俺はこういう人間は苦手だよ、秘密を握ると人形のように振り回されるのは嫌だぜ。

呆れて俺は観客席に移動する。そして俺は頑なに陽子さんと関わらないことを誓うのであった。

『受講NO・1番、リングに出なさい』

アナウンスがかかり、筆記テストトップが出てきた。

赤い帽子を被り、尻尾のようにヘアゴムで結ばれた黒髪が飛び出し、緑のチェックを着ている。今風の少年とも言えるな。

さて、俺がすべき事はこの世界の平均と最高を知る事である。この年代の最強はどれ程なのか？ 見させてもらう。

「僕は後攻で良いです。先生からお願いします」

「ならば私のターン、ドロー！！ ブラッド・ヴォルスを攻撃表示で召喚。カードを一枚伏せ、ブラッド・ヴォルスに悪魔の口づけを装備し、攻撃力は2600だ！！ ターン終了」

試験管……ブラッド・ヴォルス悪魔の口づけ 装備、伏せカード一枚。

中々だが……ある意味、無様だな。そんなデカイのを出されて攻撃できないと、勘違いするバカがこの世界にいるのか？ 元の世界なら死者への手向けで一撃だぞ。

それに禁止カードではあるが、強奪で奪われてシンクロに使われて終わるのがオチだ。そんな事を考えている間に、NO・1はドローしていた。

「僕はサイバー・ドラゴンを特殊召喚！！ 相手の場にモンスターがいて、こちらにはモンスターが無い時、コイツは特殊召喚できる」

鋼鉄で出来た機械の竜が出現する。なんとサイバー流の使い手か……なら圧勝だろう。ロイドよりサイバーの方が俺は好きだ。

しかし俺の予想を裏切るようにNO・1は魔道戦士ブレイカーを通常召喚した。観客も驚きを隠せないようだ。

「君はサイバー流じゃないのか？」

NO・1は頬の端を吊り上げて、僕は勝つ事にしか興味ありませ

ん、とあっさり宣言した。

「そして僕はブレイカーの効果を発動、コイツに乗った魔力カウンターを取り除き、伏せカードを破壊します」

碎かれるカード、伏せられていたのは聖なるバリア・ミラー・フォース。攻撃表示のモンスターを壊滅させる凶悪なカード。俺のデッキにもちゃんと入ってるぜ。

「最後に800ライフを使用し、洗脳・ブレイン・コントロールを発動します。これは相手の表側表示のモンスターを1ターンだけ奪います」

意気消沈の皆さん。そりゃそうだろうな、と俺も言いたいが……規格外の出来事に俺も困惑している。

コイツは何者だ？ この実力ならアニメのメインメンバーの実力を凌駕しているぞ。

「全てのモンスターで攻撃です。これで終わりですよね？」

両手を地面につけて引き籠もりの人間のように暗いオーラを放つ試験官。リングの外の試験官も口があんぐりと開いてるよ。

リングから出てきたNO.1は俺の前に近づいてきて、こう言った。

「やあ、君の決闘は見させて貰ったよ。強いね……大和遊夜君でしょ？」

「名乗るならお前の名前も言え。それは人に言う言い方ではないぞ」
そうだったね、と呟くNO・1。コイツはとことんウザイ性格のようだな。

「僕の名前は龍崎^{りゅうせき} 白也^{はくや}、主にドラゴン族たちを扱う。君が本当の実力者なら、僕の一軍を使って決闘してあげるよ」

「生憎、俺はお前なんかに興味は無い。おちよくって欲しいなら、向こうにいるお姉さんにでも頼め」

俺は陽子さんを指差す。あの人は実力者が二人も出てきたから、震えているのか？ まあ、嬉しいのだろう。迷惑だけだな。

「分かった。今度、デートと称して決闘してもらおう事にするよ。アカデミアで会えたなら、君と戦うこともあるかもしれないね」

変な置き土産を残して行きやがって……邪神共で苛めてやろうか？ それはもうどうでも良い。

デッキ調節もあるんだし、俺はこれにて退散するか。試験官の先生にもう帰って良いかと聞く前に、美優さんに引つ張られて家に帰った俺。

その途中でぎりぎりで来るバカがいたよ。たく十代かよ、顔が違ったから関係無いけど。

これからやる事は——竜崎だ、あ、違った龍崎だ。

アイツはある意味面倒だ。現実の決闘者なみの実力を誇っていた。

腕がなるといふより、アイツを地獄に落としたい。

そして俺は倒すデッキの構築の第一段階を始めるのであった。

ドームの中は未だに静寂が包んでいた。当たり前だ、龍崎白也と大和遊夜の起した（ある意味）一方的な試合の後だ。

『なっちー……何だかお兄さんより強い人たちが出てきちゃったね……』

精霊の言葉にすぐに答えられなかった少女。大和が出て来て喜びを感じていたのは一瞬。

彼の使っていたデッキはレッドアイズ・ブラックドラゴンではなく、天使族を主要とするデッキで更に切り札は見た事もないモンスター達。

「あのモンスターを見たことは……？」

『私知らないよ、おまけに威圧ガンガンにぶつけられたし』

先程のマスター・ヒュペリオンの攻撃する時の威力はその為であった。主に近づくハイエナを追いやるような殺気で……。

徐々に皆が喋り始めたところでスピーカーから、

『受講番号N o . 3はリングに出てください』

と呼び出しを受ける。

先程の決闘者たちのおかげで自分達にも期待の視線が投げかけられる。少女は慣れているが、他の受講者の中にはガチガチに固まっている者もいた。

床がしっかりと接続された瞬間に少女はデュエルディスクを展開する。

「受講番号N o . 3金木^{かなぎ なつき}夏輝、よろしくお願いします」

「では始めよう」

「「決闘!!」」

試験管LP4000

金木夏輝LP4000

「先行は君から行くかい？」

少女は首を横に振り、率直に告げる。

「先生からどうぞ」

それを聞いた試験管はカードを一枚引くと岩石の巨兵を召喚し、デュアル・サモン
二重召喚でホーリーエルフを召喚してターンを終わらせた。

精霊こと水霊使いエリアは苦笑いをした。この世界で守備力2000はどうしても破壊しづらい、融合や特殊召還なら話は別だが…。

「（いいエリ、これぐらいで屈するようじゃ……私はあのNo.13にもNo.1にも届かない。実力で勝てないなら、フィールドを変えればいいのよ）」

そう心の中で説教しながらカードを引いた夏輝。ここでこのカードを引けたのは、運が良いとしか言いようが無い。

しかし使わないわけではない。少女は、

「私はフィールド魔法 伝説の都アトランティスを発動する。蘇れ、忘れさらし都市よ……！」

辺り一面に大量の水が発生しフィールドがソリッドビジョンの深海に変わる。

「そして手札より憑依装着・エリアを攻撃表示で召喚する……！」

彼女のデュエルディスクから飛び出るように現れた水色の髪を持つ少女。彼女が夏輝の相棒の精霊 エリアだ。

『最初から登場って、すぐにやられそうなんですけど……』

弱気なエリアの発言にちょっと同情してしまう夏輝。しかし彼女はいつも通り、

「（へんなこと言ってる暇があるなら、前をちゃんと向く！！もしもの事があつたら死者蘇生を使うから）」

その事を聞いたエリアは涙目で、

『それ全然大丈夫じゃないよー！！ 最近なっちー酷いよー！！』

ガン無視しながら彼女は攻撃宣言を行なう。

「攻撃力が2050になった憑依装着・エリアでホーリーエルフを攻撃！！」

エリアの攻撃でホーリーエルフが悲鳴を上げて碎け散る。それに
一安心するエリア。

「私は二枚カードを伏せてターン終了する」

試験管……岩石の巨兵、伏せカード一枚。

金木夏輝……憑依装着・エリア、伏せカード二枚。

「では僕のターンだ。カードを一枚伏せて岩石の巨兵を生贄に、千年の盾を攻撃表示で場に召喚しよう」

試験管の前には一つの目が描かれた紅き盾が君臨する。それに疑問を抱く夏樹。

千年の盾は大抵のモンスターの攻撃を通さないばかりか、あの海

馬瀬戸のみが所有する白眼の白龍とも渡り合えるカードだ。

だがそれは守備表示での話だ……なのに試験管は攻撃表示で置いた。その行為は自殺行為にしかない。

なぜなら千年の盾の攻撃力は0しかない。それはレベル一のモンスターでも破壊できる弱さだ。

「攻撃表示で置くって、どうしたんですか？ 何かすごい作戦があるんですか」

試験管はニヤリと頬を吊り上げて、

「今から分かるさ。ここで魔法カード右手に剣を左手に盾を、を發動する。これは攻守を逆転させるカードだ、No.3を取れている君なら分かるだろう」

『な、なつちー千年の盾が……』

「攻撃力0が3000に……ですって？」

その通りと、答えるグラサンを掛けた試験管。

「千年の盾で攻撃だ！！ 行け！！」

エリアは夏輝のフィールドを逃げ惑うが千年の盾を回避しきれずに……、

『なつちーちゃんと助………』

最後の一言が言えずに墓地に送られてしまった。しかも彼女の行為はソリッド・ビジョン越しでも見えていたので、周りからバカにした声が聞こえてきた。

「なんてだらしねーモンスターだ」とか「逃げ惑っちゃって、まあ可愛こと」や「よわっちいの」など、エリアに対するマイナスの声が彼女の耳に響いた。

エリアはあれでも自分を支えてくれた仲間であり、決して主従関係で結ばれた者ではない。

その証拠の如く彼女は夏輝のことをなっちーと呼ぶし、夏輝も彼女の事をエリと呼ぶ。

「……やってやるうじゃないの……エリ、全開で行くわよ」

その声に墓地にいるエリアも、

『やるに決まってるよ。ふざけたギャラリーを、さっきの人たちのように黙らせちゃおう』

試験管がエンドすると、彼女はデッキから思いっきりカードを引いた。

試験管LP4000

金木夏輝LP2600

この時代のカードで相手を捻じ伏せるには、多重にカードを使う

か、装備魔法の類で強化するか、切り札で一撃を狙うぐらいしか、殆ど存在しない。

その中で夏輝の場合は、

「私は死者蘇生で憑依装着・エリアを蘇生させる。現れなさい、この状況では貴女が一番に輝くのよ」

ヒーローの登場のように颯爽と現れたエリア。今度のエリアには闘志と漲る自信がある。

再び登場したエリアに嫌味を飛ばしまくるギャラリーを無視して彼女達は続ける。

「さらに巨大化をエリアに装備して攻撃力を二倍に。更に、ダブル・アタックを使い、手札からダイダロスを墓地に送ります」

身長が3メートルに及ぶほど大きくなったエリアにダイダロスの加護を受けて追加攻撃が可能になった。

その姿を見て外野の一人が叫んだ。

「聞いた事がある。カードギャングばかり襲い、そのパートナーに霊使いシリーズの水霊使いエリアを使う……“カード狩りの死神”まさかこの三番が……」

それを聞いた周りがざわめき怯え始める。

エリアと夏輝は不適に笑い、さらにもう一枚魔法カードを発動する。

ヘルカイザー亮の攻撃よりも幼いが、代わりに彼女達の姿は初々しく美しかった。

そして彼女達はお互いにハイタッチする、お互いの絆を確かめ合うように、勝利を分かち合うように。

二人がこのデュエルで感じたモノは——新しい風と自分達の成長であろう。

それを見てた少年 日山 ひやま こたけ 古代は確かに言った。

「かけー……アカデミアを目指す奴の中にはあんなのがいるのか……わくわくして来たぜ!!」

第二話 アカデミア二次試験 重なる道（後書き）

ルールに引つかからないかどうしても心配になってきます。
そして感想を貰えると有りがたいです（自分が世間でどう評価されているか心配）。

第三話 イカサマは程々にしましょう大和遊夜君

第三話 イカサマは程々にしましょう大和遊夜君

俺は乗り物が嫌いだ。だからちよつと揺らされた位で、俺は浜辺に打ち上げられた魚のように死んでいた。

へりに乗せられて辿り着き、鮫島校長先生の話に立つたまま聞かされて、俺はクタクタだった。まっすぐ寮に向かい、改めて格差社会の一片を確認する。

オベリスク・ブルーは豪華な館に高貴な貴族が食うような料理で、ラー・イエローの我等は中流の域と分かるが……オシリス・レッドは酷すぎるわ。

まず、何だよ修学旅行の差は！！ 野宿って聞いたことねえぞ。それに海馬社長にも文句はあるんだ。

なんだよオベリスク・ブルー>ラー・イエロー>オシリス・レッドって、所持者順だったら逆だし。ピラミッドに直したら、

ラー>オベリスク〃オシリスだし。何だよ嫉妬してんのかつつうのお！！ って落ち着け俺！！ 暴走するのは良くない。

ここで異世界から来た人間で社長みたいなタイプがいたら、「ふははははは、弱い犬ほどよく吠える。この負け犬が」とか何とか言われそうだし。

実際に俺のガチデツキは克也さんとみたいに、アンティや貰った

りして出来たデッキだし。

自分の心を映しているように見えるからソウル・ミラーデッキと名づけたが……大抵の人が、これで良く事故らないね、って思うデッキだし。

まさに運が作用するデッキだ。レッドアイズも入れているぞ（四枚目）。

ふうー、と一息。

一通り落ち着いたから久し振りに三重ロックデッキと神殿を守るデッキを作っていたら自室の扉が開いた。

「こんにちは。隣の部屋となった……って大和君？」

不思議そうにこっちを見るのは赤い帽子を被った龍崎白也。あのNo.1だった。

「お前の登場は嫌がらせか？ それとも挑発しに来たのか？」

俺が威圧をかけているのに物ともせず、アイツはちゃらちゃらした笑顔で

「そんな怖い顔で睨まないでよ、僕は隣の部屋の住人に挨拶に来たら君がいただけだから……」

とことん爽やかな笑顔を振り撒く龍崎。鬱陶しい限りだ……ってコイツ今何って言った？ 隣だと。

毎日、このツラを拝まないといけないのか？

「何の運命なんだよ！！」

「紅い糸かも」

「ざけんじゃねえええええ！！」

思いっきり吐く所だったぞ、うつ。ツッコミ入れただけで再び吐き気が押し寄せてきた。

『白也……俺はお前のことを……』

『大和君……僕は……』

もう生物学的に壊れつとるわああああ！！ やばい、ホントに吐きそうだ。

「大和君もしかして本気にしたのかな？ 大丈夫、僕はボーイズラブの属性は持ち合わせていない。安心してくれ」

「十分に大打撃を受けすぎて安心できるか……！！」

そして龍崎は、

「紅い糸の代わりに、ライバルと言う鎖を置いて行くよ。僕らの運命はそっちのほうが良いでしょ？」

笑顔から真顔に変わった龍崎。俺の感想は、全く持ってふざけんなの一言だ。この顔を見るだけでも吐き気がするつうの。

俺が突っ伏している間にアイツはどこかへ行っていた。本当に地獄だ、原作介入は出来ないし、原作ブレイクも出来ない。

個人的にはカイザーが闇に染まる瞬間を、俺が染めてやりたかった。だって、人の変わる瞬間ほど奇跡的な事は無い。

人が変わると言うことは、良かれ悪かれ人生で成長した瞬間だ。それを見られるのだから。

だが、さすがに闇に堕とした後にボコボコのギタギタにされそうなので止めておく。

気分が優れないので購買部に行ってみた俺。適当にお茶を取って、レジへ。

一気に飲み干し終えた所に女子が一人来た。この学校では女子は全員ブルーに配属される、勉強に付いて行けなくなった時はどうするのだろうか？ まあ考えないでおく、俺の知っている限り女と言う生き物は男よりしつかりしているからだ。

俺の所にきた女子は、黒髪のショートカットで髪の内側に青のヘアピンをしている。恐らくだが、それが無ければ男とも思えるだろう。というか女子の服装で更にオシャレと言うものが無ければコイツは絶対に男と勘違いされるだろ。そう思っている間に、俺の見知らぬ女子生徒が口を開いた。

「アンタ……あの13番でしょ。私と決闘しない？」

左腕にあるデュエルディスクを俺に見せ付ける。普段の俺なら、どこぞの馬の骨の如くOKと言っていただろう。

だが今回持ち合わせているデッキでは一方的な試合になってしま
う恐れもあるし、なにより初披露のイカサマが出来ないじゃないか。

「残念だが今は断る。夜からならOKだ」

その言葉を聞いた女子生徒は、

「アンタ……校則を分かって言ってるの？先輩達の話じゃ、夜に
立ち入り禁止区域に入った為に制裁決闘なんてあつたみたいじゃな
い」

うん確かにあつたよ。十代たちが廃寮に入って迷宮兄弟と戦った
よ、そして校長先生を喜ばしていたよ。

最後にはクロノス教諭を悔しがらせてたしね。今のクロノス教諭
は改心しているから大丈夫だと思うけど……。

俺は率直に言わせて貰おうかな、おほん。

「月下の決闘も面白そうだと思うし、それに危険と言うスパイスを
ほんの少し混ぜるのも甘美だからだ」

そうイカサマで稼ぐって、そういう美学を身に着けないと、やつ
て行けない時もあるし。

女子生徒は、呆れた、と一言だけ呟くと、

「分かったわ。私は金木夏輝、あんたの名前も教えて」

「俺は大和遊夜だ。遊夜で構わん」

そう言ったら金木はいきなり「……アンタ……今なんていったの……？」と聞き返してきた。

メンドクサイ女だな、と思いながら俺はもう一回言っただった。

「だ・か・ら、大和遊夜だ」

それを聞いた金木はこう聞き返してきた。

「アンタ……もしかして美優先輩の弟？」

「そうだけど、どした？」

金木は殺気をビンビンに垂れ流しながらデュエルディスクを展開して、

「予定変更よ、今すぐ私と決闘しなさい。さもなければ大和遊夜……アンタの秘密を他人に告げるわ」

とほざいて来た。全く持って意味不明だ。何だよ秘密って？俺に大それた秘密なんてあるわけ……異世界人と言っ秘密があつたわ。確かに大きな秘密があるわな……って何でコイツが知ってんだよ、ふざけんじゃねえぞ。

世界にイレギュラーが入ったら世界が滅茶苦茶になるように、俺という存在が入った事によって巻き起こった事態も少しながらある。

例えばだ、ある池があるでしょう。そこに住む魚は、天敵も無く穏やかに暮らしていた……そこにブラックバスなどの魚を投げ入れてみる、一瞬にしてその種の棲家になる。

現にだ、俺は入学試験まで間の時間に、俺は決闘者狩りをしていた。まさに外来種問題の一つに入るだろう。

更に言えば俺はシンクロやエクシーズなどのカードを所持している。見つければ大変な事になるだろう、まさに絶体絶命だ。

「……わかった。俺は全力でお前を捻じ伏せる。だが時間をくれ、生憎な俺のデッキは自室にあり、更に未完成だ」

「だったら一時間後に闘技場まで来てくれればいいわ」

闘技場……個人的には完全却下だな、そうだな……山が良い所かな。

「済まないが闘技場は無理だ。山のふもとで決闘だ、俺のカードの中には幻のレアカードが何枚が入っている。変な奴等に見せびらかして良い物じゃないしな」

コクリと頷いた金木。

「わかった、だったら三時間の猶予をあげるわ。私も全力でアンタと戦いたい」

そうして俺達は別れた。

ここで二人はお互いに大きな勘違いをしていた。

夏輝はアンティ・ルールでカードを入手していた事を言ったのだ。そして遊夜は異世界人と言う秘密を守ろうとしている。

そして二人はデッキを調節し、己が感じる最強のデッキで決戦の場へと向かう。

『なっちー、本当にやるの？ 私的に何か嫌な予感がするんだけど

……』

「エリは黙ってて。私の中で大和遊夜と戦える機会が出来たから良いの、美優先輩に弟がいるなんて初耳だからね」

この世界で大和遊夜は本来存在しない。元の世界で美優が遊夜を助け死んだように、こっちの世界では遊夜が助けて死んだと言う事になっていたはずだった。

彼という存在が介入した事によって、本来は巡り会わない者達が集うのだから。

「それに私に分かるのよ。アイツは卑怯でも正攻法でも成せる実力があるって」

実際にその勘は当たっている。遊夜は前に、マジシャンとして稼いでいる叔母の手伝いをしていた事もあるし、カジノのディーラーとして働いている小父に技術の奪い方を学んでいる。

簡単に言えば不正行為の技術も、正攻法の技術もコピーは出来る。

神楽坂 鏡のようにマネは上手いのだ。

彼と遊夜の違いは個性が出るか、出ないか……それだけかもしれない。

アカデミア山のふもとに最初に来たのは夏輝だ。隣はいつも通りエリアがいた。

『後三分だね。歓迎会に出なくて良いの？ 豪華なご馳走だったのに』

確かに、一般の家庭である夏輝にはホッペが落ちるほどの料理の品々だった。だが大和遊夜との決闘と天秤にかけたら、やはり決闘だ。

自分の実力を確かめる為にも、そして彼の實力はどれ程なのかも。そんな事を考えていたら、黄色の制服を腰に巻いた遊夜が来た。

「五分ばかり遅れたか？」

「きっかりだよ。始めようか」

二人はデッキをシャッフルし始める。お互いの何かをぶつけあうように、己の何かを確認しあうように。

「「決闘！！」」

大和遊夜LP4000

金木夏輝LP4000

「俺のターン。俺は神の居城・ヴァルハラを発動して、俺の切り札の一枚^ザ The ^{スプレンドイド} splendid ^{ヴァイナス} VENUSを特殊召喚！！！」

神の降臨する玉座に金星の天使が舞い降りる。世界に一枚づつしか存在しないと言われるプラネットシリーズの一枚。

その効果は裁きの光で天使以外のモンスターを弱体化させ、自分の扱う魔法・罠カードを無効化されない、という力を持っている。

その姿に唖然としていた夏輝が叫んだ。

「な……なんでアンタが幻のカードを所持してるの！！」

彼女の反応は実に普通だった。プラネットシリーズのカードを学生が持っている筈が無い、更に彼の大和家はこの世界で全員がドラゴン族の使い手だ。

その中で彼は天使を使つたのだ、そこで彼女は実技試験の時を思

い出した。彼は以前から他のカードを使っていたではないかと。

だが、夏輝が試行錯誤している間にも彼の毒が回り始める。

遊夜はデュエルディスクの右端を展開してフィールド魔法を発動した。

「更に俺は魔法使い族の里を発動する。コイツは俺の場だけに魔法使い族が存在すれば、金木は……魔法を発動できない。だが俺の場に魔法使い族がいなければ、逆に俺が魔法カードを発動できない。だが……」

彼の行動はこの世界では意味不明だ。だが、夏輝は既に感じていた。この人間はとても危険だ、と。

「^ザThe ^{スプレディッド}splendid ^{ヴィーナス}VENUSの効果で俺は無効化される事は無い。天使の施しを使い、三枚カードを引き二枚捨てる」

夏輝の額に汗が流れる。それに気付いたエリアが、

「なっちー、大丈夫？ 私が手札にいるから大丈夫だと思うけど……」

「（大丈夫……エリ、心配しないで……）」

言葉ではそう言っているが、夏輝は不安でいっぱいだった。何か恐ろしいコンボの気配を感じる。

「俺は魔導戦士ブレイカーを召喚し、カードを二枚伏せてターン終了だ」

大和遊夜の場……^ザ The ^{スプレディッド} splendid ^{ヴィーナス} VENUS、魔導
戦士ブレイカー、神の居城・ヴァルハラ、魔法使い族の里、伏せカ
ードが二枚。手札一枚。

「ドローー！！ 私は憑依装着・エリアを召喚！！」

デュエルディスクから飛び降りるように登場したエリア。しかし、
「罠カード発動、落とし穴。攻撃力1000以上のモンスターが召
還・反転召還されたとき、そのモンスターを破壊する」

彼女の足元に大きな穴が開きエリアを飲み込んだ。

「いやああああああああああ！！ 酷iiiiiiiiiiii
iiiiiiiiiiii………」

エリアの断末魔が響いた後に、

『ごめんなっちー……。召喚に成功できなくて』

白の三角巾をつけて彼女は日本の亡者のような感じで、申し訳な
さそうに出てきた。

一方の夏輝は齒噛みを何度かしていたが、

「（今のは私のミス。アナタを召喚するタイミングは今ではなく、
後の方が良い事は十分知っている筈なのに……）」

実際に夏輝が勝利する時の前触れとして、彼女のカードがピンチの時に来るが……始め方に出して良い時は一度も無い。

手札にあるサイクロンのカードを忌々しく睨みながら夏輝はカードを四枚伏せてターンを終了した。

金木夏輝の場……伏せカード四枚。

大和遊夜の場……ザ The スプラレンディッド splendid ヴィーナス VENUS、魔導

戦士ブレイカー、神の居城・ヴァルハラ、魔法使い族の里、伏せカードが一枚。

遊夜がデッキに手をかけた所で夏輝はどうしても身構えてしまった。恐ろしいカードが来そうだからだ。

「俺は魔法カード強欲な壺を使う。これで俺は二枚カードをドロ―する」

ここでエリアの気配がないことに気付いた夏輝。辺りを見渡すと彼女は遊夜の手札を確認していた。

そこで彼女が叫んだ気がしたが、それは夏輝の耳に届く前に遊夜の声に掻き消された。

「俺は死者蘇生を二枚発動し、蘇れカオス・ソルジャー - 開闢の使者と大天使クリスティア!!」

青と金の甲冑を身に着けた始まりの戦士と、不死にも等しい天使が舞い降りた。

遊夜の場合には、カオス・ソルジャー・開闢、大天使クリスティア、
The splendid VENU^{スプレディッド ヴィーナス}S、魔導戦士ブレイカーが存在する。

彼らの攻撃をそのまま受けたら、彼女のLPは一瞬にして消し飛ぶ9500だ。彼女は伏せカードを発動する。

「罨カード、激流葬を発動し全てのモンスターを墓地へ送る！！」

モンスターが出て来た時に使える激流葬。これでこの世界の人間は安心するはずのだが、彼女は安心できなかった。

何故ならここまで追い込んでくる人間だ。何が来てもおかしくない、それがどんな方法であろうとも。

そこで遊夜は口開く。

「残念だが伏せカードは王宮のお触れだ。これでお前の罨カードの効果は無効となる、カウンター罨があってもThe splendid VENU^{スプレディッド ヴィーナス}S《ザ スプレディッド ヴィーナス》の効果で使えない」

その言葉を聞いて彼女は地面に両手をつけた。確かに、彼女の伏せカードの中に神の宣告がある。

これで王宮のお触れを無効化したくとも、—The splendid VENU^{スプレディッド ヴィーナス}S《ザ スプレディッド ヴィーナス》が邪魔をする。

自分は負けたのだと……そう夏輝は感じた。そしてこの実力は彼女が感じた事ない、まさにデュエリスト・キングのような域である。遊夜は小さく呟き、それを最初に聞いたエリアは目を見開く。

「……この勝負……俺の負けだ。やっぱりこんな勝ち方じゃ、面白くない」

彼はデッキに手をかざした。それは降参^{サレンダー}という事である。

それに夏輝は咆えた。こんな勝利を見せ付けられて、降参^{サレンダー}なんて許せなかった。

「……アンタ……勝ち逃げでもする気！！ 私に屈辱を味遭わせて面白いのー！」

だが、彼の一言に彼女は沈黙した。

「……俺は所詮負け組みだ。イカサマでもしないと満足に戦えない凡骨さ」

彼はシャッフルは確かにしていた、だが、それはデッキの半分だ。最初にカードの束を引いら、デッキは二つに分かれる。当たり前のことだ。

彼は左手にあるカードの束を右手のカードの束に置く時に、二つの束の間に右手の小指を挟んでいた。

これでデッキは二つに別れたままである、そして上の束だけをシ

ヤッフルする。

最後に小指を抜いて、空洞を残しつつ上の束を一番下へ少しづつ運んで完了。バンデット・キースのようなりストバンドから取り出すよりは、練習が必要になるがバレにくい。

これを夏輝に解説した遊夜。それでもやはりイカサマに勝てなかった自分が悔しかった。

涙を拭いて立ち上がり、彼女は高らかに宣言した。

「今度は絶対に負けない。絶対に私はアンタを倒す、アンタもイカサマをしなくても勝てるように強くなりなさい」

「それは俺の目標でもある。こんな技術があるからこそ、身に付かない技術もあるしな」

お互いに宣戦布告し合って二人は別れた。ライバルと言う存在を確認するように、何かを誓い合うように寮へと戻った。

「遊夜君お疲れ様、デートは楽しかった？」

「黙れ龍崎。やっぱりお前を連れてくるんじゃないかと、俺は後悔してる」

二人は二人なりに歓迎会を楽しんでいた。龍崎は夏輝と遊夜の戦

いを見ていた、一応だが遊夜には許可を取ってだ。

龍崎は肉をナイフで切りながら、

「でも楽しかったんでしょ、それでいいじゃん。なんなら僕が戦いたかったけど」

「下心丸出しの人間に言われたくない。それに誰が譲るか!」

「まあまあ、同じ異世界の人間だし。仲良くやっていこうよ」

その言葉に遊夜は黙った。龍崎白也はこの世界の人間ではない、龍崎は遊夜と同じ異世界人である。

それを知ったのはデッキを作っている最中だった。

カードを広げていたら龍崎が先生のお使いで遊夜のところに来た、そして大量の知られてはいけないカードを目撃されて。

お互いに異世界人だと知ったのである。

「そっぴゃお前は歓迎会までの間に何してたんだけ?」

遊夜の質問に龍崎は、少し考え、ゴクリとステーキを飲み込んだ後に「綺麗なお姉さんとデートをしていたよ」と答えた。

第三話 イカサマは程々にしましょう大和遊夜君（後書き）

今回は大変だったです……。次回は龍崎VS陽子さんだ……。肩が重
い……。

第四話 白と黒の戦い ユベルVSスターダスト（前書き）

色々勉強不足でルールに大量に引っかけてしまいました。
今回は陽子さんと龍崎くんです。

第四話 白と黒の戦い ユベルVSスターダスト

第四話 白と黒の戦い ユベルVSスターダスト

龍崎白也……彼は頑なに言う言葉が存在する。

「僕はあの竜崎の親族じゃない、誰があの最悪な人間の親族であるものか!!」

と全力否定の上に罵倒を上乗せする。本人曰く、遊 戯 王のノア編に入った辺りから嫌いになったそう。

また本人の中で一番嫌いなキャラクターはインセクター ハガだそう。一度シューティング・スターで五連打をしたいそうだが、カードを持っていないために無理だそう。

彼の横にはラー・イエローの少年が一人いた。

名は高田^{たかだ}真治^{しんじ}。龍崎がこっちの世界に来た時に初めて出来た親友である。

「白也……本当にこんな事していて良いのか？ いくら——導きで来たが……」

心配そうに語る真治。それは龍崎も同じであった、自分達がいかにこの時代に来ていることが既に、信じられない。

だけど龍崎は言う。

「僕らが来なかったら出来ない未来もある。それに大和さんも言っていたじゃん、僕たちはこの時代に来ていたって」

納得したような、納得できないような顔をする真治。しかし白也は、彼が言葉を言う前に約束があるから立ち上がる。

「とりあえず僕は時間だから行くよ」

「行ってくてお前、何処へ行くんだ？」

真治の言葉に龍崎白也はこの上なく嬉しそうな声と顔で言った。

「決闘デート二日目に……」

龍崎にはカードの精霊が見える。カード名は救世竜 セイヴァー・ドラゴン。

肩に乗る鳥のように彼の左肩に掴まっており、決闘の時にはデッキの中に入っている。

七時になった所でアカデミア山のふもとに来た龍崎はデッキを調節する。実にここに人が来る確立は少ない、プラネットシリーズを使ってもバレないくらいだ。

彼のデッキに救世竜 セイヴァー・ドラゴンを入れた所で影丸陽子が来た。

その名の通り彼女は影丸理事長の親族である。もし幻魔の鍵を守る事になった時に、一番に候補から外される。

だからこそ龍崎は彼女に興味を持った、自分と似ている気がしたからだ。

「影丸先輩、宜しくお願いしますね」

デッキをシャッフルしながら龍崎は言う。彼女はちょっとヤバイオーラを出しながら。

「ボクの事は陽子って言うてね。じゃないと……クロスネ……」

龍崎は今の言葉は聞かなかった事にした。正確には聞こえてない振りをした。

そんな事を感じながらデッキをデュエルディスクに差し込んだ二人。今回のデッキはお互いに全力だ。

「出し惜しみなんてしたら、ボクは君の事を呪うよ」

「陽子先輩、大丈夫です。僕は本気を出せと言われて、出さない人間ではないです」

二人は手札を五枚ドローして叫んだ。

「決闘!!!」

龍崎白也LP4000

影丸陽子LP4000

「先行はボクのターン。ボクはエアースフィア（漫画カード）を守備表示で召還し、カードを二枚伏せてターンエンド！！」

彼女の場に一枚の鳥が現れる。エアースフィアは他にスフィアがいれば相手は攻撃できなくなる、という効果を持っている。

陽子の場には二枚のカードとエアースフィア一体だけ。

デッキからカードを抜いた龍崎。彼のデッキは数々の人間と戦ってきた歴史が紡がれている。

先輩から引き継がれた黒い鳥のように孤高で、白銀の龍のように美しくあろうとする。

「僕の場にカードが存在しないときコイツは特殊召還できる。BF - 逆風のガスト！！更にBFが存在するときに、コイツは特殊召還できるBF - 黒槍のブラスト！！ついでに魔導戦士ブレイカーを通常召還！！」

三体のモンスターを一気に召還した龍崎。彼はブレイカーの効果を行使した。

「ブレイカーの効果でその伏せカードを破壊する、やれ！！！」

魔導戦士の斬撃が一枚のカードを砕こうとするが、それがオープンされた。

「ボクは危なそうだから和睦の使者を使わせてもらうよ。これは、このターンだけ自分のモンスターは戦闘では破壊されず、ボクは戦闘ダメージを受けない」

龍崎はカードを一枚伏せてターンを終了した。

影丸陽子…… エアースフィアと伏せカード一枚。手札三枚。

龍崎白也…… B F - 黒槍のブラスト、B F - 逆風のガスト、魔導戦士ブレイカーと伏せカード一枚、手札二枚。

彼女のターンが来る。デッキから引き抜かれたカードを彼女は召還した。

「ボクはトランスフォーム・スフィアを攻撃表示で召還するよ。そして手札を一枚捨てて効果発動！！ そうだね…… B F - 黒槍のブラストが丁度良いかな？」

巨大な球体を持った鳥獣の玉に吸収された。ブラスト、そしてトランスフォーム・スフィアの攻撃力が100から1800まで急上昇する。

漫画やアニメの効果は特に龍崎は知らないが…… 大抵がヤバイ効果だという事を知っている。

現実世界の効果では守備モンスターしか奪えない事は、龍崎は一応知っている。

「相手のモンスターを奪って攻撃力を高めるカードですか？」

「だけど……この効果はボクのターンだけ。このターンが終われば君に返すよ」

彼女はブレイカーに攻撃と宣言した。ブラストが入った球体を投げたトランスフォーム・スフィア、龍崎は伏せカードを発動する。

「罨カード ガード・ブロックを発動！！ その戦闘のダメージをゼロにして僕は一枚ドロ―する」

手札にきたカードはBF - 極北のブリザード。彼は迷う事無く手札に加えた。

「トランスフォーム・スフィアは戦闘を行った後に守備表示にしなければならぬ。ボクはこれでターン終了だよ」

影丸陽子……トランスフォーム・スフィア、エアースフィア、伏せカード一枚。手札二枚。

龍崎白也……BF - 黒槍のブラスト、BF - 逆風のガスト、伏せカードなし。手札三枚。

「僕のターン、ドロ―！！ チューナーモンスター、BF - 銀盾のミストラルを攻撃表示で召還して、Lv2ミストラルをLv4ブラストとLv2ガストにチューニング！！」

「ちゅ、ちゅーなーモンスター？ チューニング？」

彼女は興味深そうに彼のミストラルを見つめる。その間にもシンクロ召還は行われている。

「集いし願いが新たに輝く星となる。光さす道となれ、シンクロ召喚！！ 飛翔せよ、スターダスト・ドラゴン！！」

白銀の美しき星屑の龍 スターダスト・ドラゴン。かつてシグナールの不動遊星の切り札のドラゴン、元の世界では破壊効果を使えなくさせる為に好まれたり嫌われたりしたドラゴン。

「その……シンクロ召還はどういうものなのかい」

「シンクロ召還とは融合がいらない一風変わった召還方法です。チーナーモンスターとそれ以外のモンスター墓地に送り、レベルを足して、その数と同じシンクロモンスターをエクストラ……もとい融合デッキから召還します……」

ふーん、とまるで研究対象が出てきたような顔する陽子。それに寒気がした龍崎。

「僕は月の書でエアースフィアを裏側にしてスターダスト・ドラゴンで攻撃。シューティングゴニック！！」

エアースフィアが裏側になった事に大気の壁が消えて、スターダスト・ドラゴンが襲い来る。

「伏せカードオープン、万能地雷グレイモヤを発動しそのドラゴンを退場させようかな？」

龍崎の頬が軽く引き攣った。それは効果をお披露目するときの笑顔で、

「スターダスト・ドラゴンの効果発動！！ カードを破壊する効果が発動したときにこのカードをリリー…… 生贄にしてその効果は無効化！！ ヴイクテイニ・サンクチュアリ！！」

星屑の龍は己の身を己の力で守った。場から離れた為に攻撃が不成立になってしまった事に、少し悔しがる龍崎。

「中々厄介な効果を持つてるね、じゃなきゃボクが興味を持つがはずがないか」

彼女が油断しているので龍崎はスターダストの効果을告げた。

「最後にスターダスト・ドラゴンは効果を使ったターンのエンドフェイズに場に特殊召還されます。カードを一枚伏せてターン終了です」

龍崎の墓地から飛翔したスターダスト・ドラゴン。それを忌々しく思うように陽子は、

「イヤらしい効果を持つてるね。だけど、効果範囲は破壊だけですよ。魔法カードクロス・ソウルを発動！！」

そのカードを見た時に龍崎も忌々しく思った。彼女の洞察力の通り、スターダスト・ドラゴンは破壊効果だけしか発動しない。つまり生贄召還（アドバンス召還）のために使えば良いのだ。

「このカードは相手モンスターを一体をこのターンだけ、ボクのモ

ンスターの生贄の代わりにする事ができる。バイバイ……星屑のドラゴン」

スターダスト・ドラゴンとトランスフォーム・スフィアが消えうせて代わりに現れたのはユベル……。

「な……なんで貴女がそのカードを持つてるんですか!! そのカードは「遊城十代しか所持していないはず……」って言いたかった?」

意気消沈する龍崎、そんな彼に対して陽子は言った。

「これはボクの知り合いが何故か持っていたんだ。精霊ではないけど効果は恐ろしいから、アンテイで貰ったんだ」

陽子の言っている事が大体理解できた龍崎は驚き戸惑う。

転生者というべきなのか? 異世界人にこの世界の人間が勝つと言う初耳の事態の上に、精霊の存在を知っていると言う事が、有り得なかったからだ。

この世界では闇のゲームはおるか、カードの精霊の存在も知られていない。町の人に聞いてみたら笑い飛ばしてくるだろう。

「さてと、解説も終わった事だし。ボクはカードを二枚伏せてターンエンドね、ユベルの生贄も忘れちゃいけなかったね」

影丸陽子……ユベルと伏せカードが二枚。手札ゼロ枚。

龍崎白也……伏せカード一枚。手札ゼロ枚。

デッキに手をかける龍崎。手札が増える事は良いが、逆転できるカードをすぐに引ける訳でもない。

だがカードを引かなければ何も始まらない、行動を起さなければ良い事も起こらない。

「僕のターンです。僕はチューナーモンスター、BF・極北のブリザードを召還し効果発動！！墓地に存在するLv4以下のBFを特殊召還できます。現れるBF・黒槍のブラスト！！」

二体のモンスターが並んだタイミングでモンスターが激しい激流に飲まれて墓地に送られる。

「なっ！！ 激流葬か」

「ご名答と言う代わりに、彼女は伏せカードを龍崎に見せ付ける。そこには罠カード激流葬が見えていた。

「ここでユベルの効果を使うよ。ユベルは第二形態でもあるユベル
Das ^{ダス} — Abscheulich ^{アブシエリッヒ} Ritter ^{リッター}に進化する！！」

傷つけられた痛みの方だけ相手にダメージを与えるカード。そこには二つの頭を持つ禍々しい龍が存在した。

龍崎がユベルに勝てるカードは今の所、スターダスト・ドラゴンだけである。何度も龍崎のピンチを救ったセイヴァー・スター・ドラゴンなら更に良いが召還条件が難しすぎる。

現状維持、彼はそう感じた。

「僕はターンエンドです」

彼女のターンになった。それだけでも嫌な汗が垂れ流れる。

「ボクはね……凶暴化の仮面をユベル・Das^{ダス} — Absch^{アプシエ}eu^{リッヒ}
lich Ritter^{リッター}に装備するね。知つての通り攻撃力を1000アップさせる」

第二形態の攻撃力が0から1000に変わる。元々ユベルは己の効果を最大限まで使う為に攻撃力が0である。

だから、相手の場にモンスターがない時にはダメージを与えない。そういう時の為に彼女は装備魔法を入れている。

「ユベルで龍崎くんを攻撃……」

ユベルの攻撃が龍崎へ迫り来る。もちろん彼はダメージを受けないので、

「伏せカード発動、ガード・ブロック。ダメージをゼロにしてカードを一枚ドロー……!」

これで来なければ確実にピンチだ。デッキからカードを、決闘者の剣を引き抜いた龍崎。

恐る恐る確認すると、アニメではお互いに手札が六枚になるまでカードを引く事が出来る最強の手札補強カード、天よりの宝札だっ

た。

これで逆転の一手が引ける可能性が多大に増した。

「いいカードは引けた龍君？　ボクの直感では、次のキミのターンでボクを仕留めるだけのカードが来なければ……」

緊張の中で彼女の言いたい事が先に龍崎の頭の中で響いた。

『キミ……負けるよ』

冷や汗を拭いて龍崎はデッキに手をかける。そして彼女の声が響く、

「これでボクのターンを終了するね」

影丸陽子…… ユベル・Das — Abschaulich Ri
tterと伏せカードが一枚。手札ゼロ枚。
龍崎白也……場のカード無し。手札一枚。

本当にデッキが遠くに感じる、そんな時にいつも自分を受け入れてくれた皆を思い出す。

彼らの笑みを感じながら龍崎はドローした。

「僕のターン、ドロー……！」

来たのは大嵐。元の世界では禁止カードと制限カードの領域を何

度が移動した経験を持つカードである。

「僕は、手札より魔法カード　大嵐を使い場の魔法・トラップカードを全て破壊し、手札より天よりの宝札を発動する！！　お互いに手札が六枚になるまでドローだ！！」

龍崎は手の痣が疼くのを何度も感じたが我慢しながら六枚のカードをデッキから引いた。

「ここに来て最強ドローカードを引けるって、どんな運を持つてるの？　美優も厄介だけどさあ」

彼女の愚痴は龍崎の耳には届いていなかった。そして彼はデッキより引き抜いた仲間を召喚した。

「そして僕は、BF - 逆風のガストを特殊召還する！！　そしてBF - 極北のブリザードを通常召還して効果発動！！　墓地に存在するBF - 黒槍のプラストを特殊召還し、チューニング！！」

ブリザードが三つの光輪に分かれ、その中にプラストとガストが入る。

「集いし願いが新たに輝く星となる。光さす道となれ、シンクロ召喚！！　飛翔せよ、スターダスト・ドラゴン！！」

龍崎の詩と共にエクストラデッキより到来したのは二体目の星屑の龍。

「またスターダスト・ドラゴンか……他のモンスターだったら良かったのにな、飛翔じゃなくて自重してよ……」

ガツカリしている陽子。龍崎はこれ以上の行動は出来ない、攻撃をすればユベルの効果で龍崎に痛みが帰ってくる。

「僕はカードを二枚伏せてターン終了です」

影丸陽子……ユベル・Das — Abschaulich Ri
tterと伏せカードが一枚。手札六枚。

龍崎白也……スターダスト・ドラゴン一枚、伏せカード二枚。手札一枚。

「ボクのターンつと、ドロー!!」

その瞬間に彼の伏せカードの一枚が開かれた。それはバスターモード。

「伏せカード、バスターモードを発動し効果を使う。場に存在するスターダスト・ドラゴンを生贄に、進化せよ星屑の龍よ!!」

彼女の前に立ち塞がるように現れたのはスターダストの進化系である、ノバスターのモンスター。

「スターダスト・ドラゴンノバスター、僕の切り札の一枚です」

龍崎の前に飛翔した白銀と蒼白の龍、スターダストを超える力と能力を携え、その身は神々しさで溢れている。

ソリッド・ビジョンとはいえその美しさは本物の龍に劣らない。

「破壊効果は無効化に出来る……か、更に進化系となったら発動ぐらい無効化してくるかな……」

彼女は一心にスターダストを見つめ考察する。龍崎は彼女の持つ直感と、分析能力の高さが恐ろしく感じた。

明らかにこれはこの世界の住人の中では群を抜いている、それは天才と言う存在なのか……異質と言うべきなのか……？

「ボクはカードを一枚伏せてターンを終了、ここでユベルの効果を
使い、ユベル - Das ^{ダス} — Abscheulich ^{アブシェリッヒ} Ritter ^{リッター}
以外のモンスターを破壊する」

「だけど、その効果をスターダスト・ドラゴン/バスターで無効化
です」

ユベルの破壊を己の身を持って防いだスターダスト。この効果を使
ったターンに彼は場に君臨する。

影丸陽子……伏せカード二枚のみ。手札六枚。

龍崎白也……スターダスト・ドラゴン/バスター、伏せカード一
枚。手札一枚。

「さあボクを倒しなよ。キミに討たれるなら今の所、悪くは無い」

分かったというように、彼はデッキからカード引いた。

「僕は死者蘇生を使い、墓地に存在するスターダスト・ドラゴンを召還し……二体で直接攻撃です」

シューティングソニックとアサルト・ソニック・バーンが彼女に当たり、陽子のライフが0と表示された。

「決闘デートはここまで」

じゃあね、と言って去って行く陽子。次はテストが迫っている事をスッカリ忘れていた龍崎は走って行った。

その時に陽子はターゲットを決めた。

「今回の狙いはキミに決めたよ……龍崎白也君、キミはボクのお人形で終わる？ それとも、その上に行く？」

陽子は探している。自分を超える男を、自分の想像の上に行く人間を、自分が認める人を……。

また彼女の伏せていたカードの一枚が天罰で、クリボーを手札に持っていた事は彼女だけの秘密である。

そんな事になってるとは知らず、イエロー寮では和やかな雰囲気
が漂っていた。

「で、何で俺の部屋に大勢来ているんだ？」

俺の質問に答えてくれたのは龍崎から始まり、

「そりゃあ、面白そうだし」

「自分のに……大和さんなら頭が良いと思って」

と龍崎の知り合いが言って、

「俺は来たらワクワク出来る決闘をするって真治が言ったから、付いてきただけだぜ!!」

十代のような台詞を吐いた知らないレッド生徒が言って。

「べつに私は美優先輩に、講師として行ってやって、言われただけだし……」

ツンデれっぽく言った金木が最後を締めた。

何で俺の部屋なんだ？ いきなり龍崎が「やあ、今時間空いてる？」と言ってぞろぞろと入ってきたし。

そして勉強会が始まって今に至りだ。何だよ、全く持って意味不明だ。

更に意味不明なのは知らない人間が入って来ているという事だ。まあ聞いたら、イエローの奴が高田真治まことと言う者で、レッドが日山ひやま古代まごというそうだ。

苗字で呼んでいたら高田は「真治でいい、名前の方が親近感が沸

く」と言っし、日山も「俺も名前で良いぜ、それより俺と決闘してくれ」とほざく。

明日はテストだけど……って、絶対に俺と龍崎が戦わせられるだろ！！ 実力者はこうもぶつかるのか。

「どうした遊夜、何か嫌な事でもあったのか？」

そう言葉をかけてくれる真治。有り難いが、明日が心配なんだ。あくまで言っが、筆記が問題ではない実技が問題なのだ。

それを伝えたくない為に俺は、

「大丈夫だ。龍崎のB.L的な発言がリターンしただけだ……」

俺の言葉に皆がドン引きした。龍崎は「会話の流れでそうなっただけだから安心して」と言っているが蔑めの目は免れなかった。

本当に最悪だ。そう俺は今日を締めた。

第四話 白と黒の戦い ユベルVSスターダスト（後書き）

次回は月一テストです。更新は木曜か金曜日になりそうです。
やっぱり遊戯王は楽しいですけど、難しい。

第五話 Eせ・HEROVS真治（前書き）

今回は真治と古代の戦いです。

E・HEROデッキを使うので手札計算をミスする場合があるかもしれません。

そのときは、申し訳ございません。

第五話 E せ・HEROVS 真治

第五話 E せ・HEROVS 真治

月一テスト、それは俺にとって最悪な日であり、一番に疲れた日であつた。

筆記テストが終了したら午後からは実技。古代は後から来てグツスリ寝てたし、真治と金木は真面目にやってるし、龍崎と俺は先にクロノス教諭に提出して購買部に行つて遊び呆けていた。

「やっぱりこの世界のテストって簡単だね。まあ普通の授業があるのが唯一の悲しみだけど……」

「お前の場合はな。俺らの場合は十分に大変だつつつの！！特に錬金術って何だよ、大徳寺先生も良くやれたよ」

実に意味不明に訳わかんねえを上乗せする。まあ、決闘は結構強いほつだけどな、あの人。

「でも良いのかい、アンタたち。まだテスト中なんですよ？」

トメさんの言葉に俺達は揃つて答えた。

「僕は大丈夫です。簡単でしたし」「全然大丈夫です。楽勝でしたし」

スポーツドリンクを飲み干しながら、俺達はトメさんの手伝いをしている。まあサボってるようなもんだ、と思うしな。

「遊夜君のデッキは何にするか、決めた？」

「特に決めてない。龍崎よお前は俺と戦う事を想定しているのか？」

もちろん、と答えた龍崎。それに関しては俺も同感だな……教師は目をキラキラさせているし、生徒は興味深そうな感じだし、陽子さんは……考えないで置こう。

さてと一応候補として、俺は天使デッキと無効化デッキを挙げている。

何と言っても龍崎のデッキの系統が分からない……この一点さえ分かれば、後は楽なのに。

そんな事を考えながらレッドアイズを見る。カードのイラストが初期であるから、ある意味嬉しかった。

何だか見守ってくれている……そんな感じだ。間違っている事には間違っていると云ってくれて、良い事には褒めてくれて、悲しい時には側にいてくれる。

とても暖かい感情に浸らせてくれる。向こうの世界で俺はシンクロが導入されて以来、コイツを使ってなかったな事を思い出す。

「……絶対に前が輝く主人公のようなデッキを作ってやる。今は不正行為に手を出した所為で、まともな技術が身に付かなかったけど……、次は本来の技術で戦えるように頑張るよ」

この言葉を言った時、レッドアイズが喜んでいた気がした。

さあて、俺はこの後はどうしようか？ そろそろ筆記テストが終わるし。

案の定、チャイムが鳴って凄い勢いで生徒が押し寄せてきた。そういえばテスト前に新しいパックが入ってくるんだっただけ……？

人の波に揉みくちやにされて気付いた時には、金木と真治の前にいた。

「白也に遊夜……大丈夫か？ 少し……服が踏まれたような後があるが……」

「それよりも何処にいたのよ？ テスト中に出て行けて、大切なカードを賭けられる自信は何処から出てくるのよ」

それはもちろん、手品師のバイトで鍛えた手品師のテクニックとデイルーの小父さんに叩き込まれたカード捌きの実力からです。

ちなみに、親父は元の世界ではバーで働くマジシャンだった。

「色んな所からだ……、んなことより真治に金木は購買部に行かないのか？」

みな顔を見合わせて、愚問と言うかのように二人は言った。

「私は自分デッキを信じているし、下手に新しいカードを入れて手札事故なんか起したら嫌だし」

「俺も同じだ。知らない強いカードがあるかも知れないが……、自

分のデッキと相性の良いカードが当たるとは限らない」

二人は自分とカードを一寸の狂い無く信じている。二人は俺よりも何十段も先に存在している人間だ。

こんな技術を持つてるが故に周りと自分を比べて、そして劣等感を感じる。周りには出来ている事が自分には出来ないと……。

こっちの世界の親父はイカサマというモノを持ってないし、美優姉さんは出来るがプライドが邪魔をして出来ないし、同級生なら良い引きを持っている。

「……臆病者か……」

自然と呟いてしまった言葉。俺は負ける事が怖いから“あれ”をするのだろっ、それで徐々に偽の勝利と気付き悲しむ。

本当に記憶喪失でもなって、こんな技術を付ける前に戻りたいな。

「アンタ……どうしたの？」

心配そうな顔をして金木が近づいてきた。

「大丈夫だ、ちょっと気分が悪かったただけだ」

そう言って逃げるように俺は立ち去った。さっさと実技試験の為に行くか。

実技試験が始まってもう二十分が経とうとしていた。しかし激戦のように生徒達の戦いは続いている。

その中で、

「美優のドローは怖いね。そしてその相棒も……」

陽子が鬱陶しそうに睨み付けているのは光と闇の竜。対して美優は、

「そういう陽子こそ、カードの弱点をすぐに暴く洞察力を如何にかしてくれないかしら？」

ジリジリと雷光と火花と闘争心を放っている二人に近づく者はいない。決闘中でも殴られそうな勢いがあるからだ。

それを見ていた遊夜達は、

「あの人たちは何をしてるんだ？」

遊夜の疑問に夏輝が答える。

「さっき、口喧嘩していたのは見ていたけど……私はその後は見ていない」

夏輝の言葉を補足するように龍崎が語り。

「お姉さんたちはね、どっちが強いかな？ って話していたけど」

と、そこを突っ込むように真治が龍崎に質問する。

「白也……お前、その情報は何処から仕入れた？」

そして決闘バカの古代が燃え上がるように叫ぶ。

「そんな事より、先輩の決闘を見ようぜ！！　どっちも頑張れ！！」

だが観戦する間など無い、と言つかのように真治と古代が呼ばれた。

二人はフィールドに行く。しかし最初に疑問に気付いたのは真治だった。

この月一テストの実技は大抵が同じ色と対戦させられる。大抵と言った理由が、先生に申請すれば別の色の生徒も決闘は出来る。

そう、今空いたのは一つだけである。他はまだ使用中である。真治がプレイヤーの立ち居地に着くと、前には古代がいた。

「クロノス先生……これはどういう事ですか？」

真治がそんな申請をした覚えはないし、古代がそんな事をする人間に思えない。色んな人間と決闘したい、と思う奴がわざわざそんな事をするはずがない。

その疑問にクロノス教諭は答えた。

「セニョール日山とセニョール高田の实力は、同じと思ったノーね。

でスーから、このような決闘にしたノーね」

真治的には龍崎と戦いたかったのである。真治はまだ龍崎を超えていない、だからこそ戦いたかった。

だが、こういうのも面白いと感じた。

「古代……お前と俺、どっちが強いやらされて頂くぞ」

「もちろんだ。ワクワクするような決闘をしようぜ!!」

二人の少年はデュエルディスクを構えて展開する。

「決闘!!」

高田真治 LP4000

日山古代 LP4000

「まずは俺のターン、ドロー!! 俺はE・HERO フォレストマンを守備表示で召喚し、カードを一枚伏せてターン終了だ!!」

デッキからカードを引いた真治。いきなり手札が大方揃っていることに喜んだが、肝心の一枚が無かった。

ならどうするべきか？ やはり待つしかないし、引くしかない。

「俺は手札より強欲な壺を発動し二枚引く」

カードを確認するが目的のカードではなかった。それに悲しみながら真治はプレイする。

「伏せカードを一枚置き、デッド・ガードナーを守備表示で召喚。それでターンエンドだ」

高田真治の場……デッド・ガードナー、伏せカード一枚。

日山古代の場……E・HEROフォレストマン、伏せカード一枚。

「俺のターンだ。ドロー！！E・HEROフォレストマンの効果発動、一ターンに一度スタンバイフェイズの時に融合を、墓地またはデッキから手札にくわえる。そして融合を発動！！」

古代の手札にいたE・HEROオーシャンとE・HEROスパークマンが重なり、フィールドに氷のHEROが現れる。

「来い、E・HEROアブソルートZero！！」

真っ白のマントをなびかせ、その身にサンダー・ボルトに匹敵する力を持ったE・HERO。

その名はアブソルートZero。真治は厄介に思っ反面、面白いと感じた。

「どうだ、俺のHEROは。かっこいいだろ！！」

古代は嬉しそうに、まるで幼い子供のようにアブソルートを見ている。その姿は本当に決闘が好きなんだと、思った。

だから真治はあのカードを引くと決めた。こういう相手には本気

……いや、全力で戦うのが義務だと感じたから。

「更に俺はミラクル・フュージョンを発動し、墓地のE・HERO
オーシャンとE・HEROスパークマンを除外して光輝くE・HERO
を融合召喚する！！」

その場に君臨したのは太陽のような輝きを持つE・HERO
The シャイニング。

「E・HERO The シャイニングは除外されているモンスター
一体につき、攻撃力がアップする。シャイニングの攻撃力は320
0！！」

観客たちはこの状況にどよめいた。この時代では攻撃力3000
を召還するのは難しい、だが彼は簡単に出して更に2500のアップ
ソルードも出している。

これがクロノスが思った同格なのだろう。しかし真治はモンスター
を複数出して戦う決闘者ではない。

「俺はシャイニングでデッド・ガードナーに攻撃だ、オプティカル
ストーム！！」

シャイニングの輝きが一層増して、デッド・ガードナーに降り注
ぐ。

それに朽ち果てるように破壊されたデッド・ガードナーしかし、
彼はタダ死んだわけではない。

「戦闘で破壊されたデッド・ガードナーの効果を使う。俺はE・H

EROAブソルトZeroを選択、コイツは破壊された時に、相手モンスター一体の攻撃力をエンドフェイズ時まで1000下げる。さらに伏せカード、ブロークン・ブロッカーを発動する」

その言葉に続いてデッキにいた、デッド・ガードナー二体が場に登場する。

「これは攻撃力よりも守備力が高いモンスターが戦闘で破壊された時、デッキにあるその破壊された同名カードを呼ぶことが出来る」

その対応に感嘆の息を漏らした生徒も多かった。しかし、元の世界では次の瞬間にはライトニング・ボルテクスが降り注いでいただろう。

悔しそくに地団太を踏んだ古代。攻撃力1500に下げられたアブソルトでは守備力1900のデッド・ガードナーを倒せない。

日山古代の場合…… E・HEROフォレストマン、E・HERO The シャイニング、E・HEROアブソルトZero、伏せカード一枚。

高田真治の場合…… デッド・ガードナー二体だけ。

「ターンエンドだ」

これで条件はある程度揃った。そして真治はカードを引き抜いた。

出てきたのは魔法都市・エンディミオン。

「俺はフィールド魔法、魔法都市・エンディミオンを発動!!」

一気に闘技場が魔法都市へと変わる。その中心には魔力を貯蓄する為のモノが存在する。

「ここで俺は二体のモンスターを生贄に……現れる、地縛神Cc^{コカ}a^{バク}pac^{アブ}Apu……」

フィールドに現れたのは地縛神。ダークシングナーが持つ三幻神にも近い力を持つ邪悪な神。

フィールド魔法が無ければ破壊されてしまうが、プレイヤーに直接攻撃できる能力と攻撃対象に選択されない効果は、この世界の住人にとって非常に厄介である。

更に地縛神はとてつもなく強大で巨大でもある。それを見ていた生徒全員が唖然としている。

ここで遊夜は龍崎に向かって問うた。

「お前が真治に……やったのか……?」

「僕はこつちの世界に来る時にカードはそんなに無かったし、今でも二百枚を超えたばかりだよ」

私は持っていない、そう言うような口ぶりに遊夜は呆れた。

二人がそんな会話している間にも真治はプレイしていた。

「このカードが俺の切り札だ。コイツは相手プレイヤーに直接攻撃

ができ、更に攻撃対象に選択されない……Cc a p a c アプ、
やれ」

Cc a p a c アプ Ap uは真治の指示で動き、古代に向かって腕を
振りかざす。

この地縛神は本物ではない。だから彼を傷つけるようなことは無
い。

しかし、それでも古代のライフは一気に減った。

日山古代LP1000

高田真治LP4000

「すげーよ真治。やっぱりこうでなくちゃ面白くないぜ!!」

五歳児がはしゃぎ回るが如く古代は燃えていた。それに真治は手
札の魔法カードを発動する。

「まだ俺のターンだぞ。メインフェイズ2で俺は天使の施しを発動
し、三枚引き、手札を二枚捨てる」

さすがにこのターンで決着を付けるカードは来なかった。真治は
カードを一枚伏せてターンエンドする。

日山古代の場……E・HEROフォレストマン、E・HERO
The シャイニング、E・HEROアブソルートZero、伏せ

カード一枚。

高田真治の場……地縛神Cコカバクapac Apアブu、伏せカード一枚。

「しゃあ！！俺のターンだ。俺はフォレストマンの効果を使い墓地の融合を手札に加える。そしてE・HEROエアーマンを召喚し、効果でE・HEROザ・ヒートを手札に」

彼の声と同時に突風が巻き起こり始める。そしてE・HEROザ・ヒートが彼の手札に入った。

続いて古代は融合を発動する。

「俺はE・HEROフォレストマンとE・HEROアブソルートZeroを融合する！！現れるE・HEROガイア！！」

そこに大地の力を司るE・HEROがいた。相手の攻撃力を半減させ、その分だけ自分の力とするE・HERO。

更にE・HEROアブソルートZeroの効果で地縛神は氷の彫刻のように凍りつき、破壊された。

「オマケに融合回収を使い、E・HEROフォレストマンと融合を手札に、融合を発動！！」

「ただ融合する気だ古代！！」

「したいだけするだけだああ！！」

と本人は主張した。E・HEROザ・ヒートとE・HEROフォ

レストマンが重なり、炎のE・HEROが顕現した。

その名はE・HEROノヴァマスター。

E・HEROノヴァマスター、E・HEROガイア、E・HEROエアーマン、E・HERO The シャイニング、古代の場に四体のE・HEROが並ぶ。

「これが俺の全力だ。いくぜ真治！！ E・HEROたちでプレイヤーに攻撃だ！！」

彼らの攻撃が真治に降り注ぐ、それは並みの決闘者では防ぎきれない。

ソリッド・ビジョンの粉塵が晴れて真治のLPが表示された。

高田真治LP4000

「なッ！！ どうして残ってる？」

「簡単な理由だ。伏せカード和睦の使者を発動させただけだ」

彼の目の前には確かに伏せカードが開いている。これでこのターンだけは真治は戦闘で発生するダメージを受け付けない。

悔みながらもターンを終了した古代。

真治はデッキからカードを引き抜いた。出てきたカードは——大

嵐。

「俺は手札から魔法カード 大嵐を発動し場の魔法・罫を破壊する、しかし、魔法都市は魔力カウンターを取り除き破壊を免れる」

魔法都市の魔力カウンターが二つに減る。

「そして死者蘇生を使う。もう一度、この場に君臨せよ地縛神よ！
」

彼のデュエルディスクが過剰に揺れ始め墓地のところから、一枚のカードが出てきて、場に顕現する。

今度は先程の比にならないほどの反応を示した。

地縛神 ^{コカバ} C c a p a c ^{アプ} A p u の顕現で遊夜は啞然とし、龍崎は知っていたように呟いた。

「……相変わらずオーバーヒートしてるね、真治……」

黒く禍々しい気配を出しながら墓地から這い出てきた ^{コカバ} C c a p a ^{アプ} A p u 。

クロノス教諭はこれを想定していなかったのであろうか、本人は意気消沈と眺めている。

「地縛神で古代へ直接攻撃だ！！」

そこで古代のライフが0と表示された。

真治はゆつくりと古代の元へ行った。

「真治……お前強いな、負けて悔しいけど。何だか燃えてきた、次は絶対に勝つ!!」

「ああ、お前の挑戦を待っている。だが……古代、お前伏せていたカードは何だったんだ？」

ほえ？ という感じな顔をした後に古代はカードを見せた。

「ヒーロー・シグナルだけど、どした？」

いやいい、と言った真治。何だか古代のE・HEROの使い方がよく分かった気がした。

ふと小さな疑問が浮かんだ真治はクロノス教諭に問うた。

「先生。そういえば遊夜と白也の対戦相手は誰ですか？」

するとクロノス教諭は何だか残念そうな顔をして、真治に話した。

「それがノーね。セニョール錬^{れん}が、どうしてもセニョール遊夜と決闘したいと言ってセニョール錬とセニョール遊夜の決闘をする事になったノーね。それでまだセニョール龍崎の対戦相手を決めてないノーね……セニョール遊夜とセニョール龍崎の試合は凄い事になる、思っていたのに残念なノーね」

本当に心底残念そうな顔をしたクロノス教諭。確かに遊夜と龍崎の試合は盛り上るだろうと、真治も思った。

龍崎のスターダストデッキとあの代行者デッキ。面白い組み合わせではある。

だがクロノス教諭も教師である、生徒の意見を尊重するのも教師の役目の一つである。

真治はちよつと残念そうに溜め息をついて、遊夜たちがいる所へ向かった。

その時、遊夜を忌々しそうに睨み付ける少年がいた。それは恨みに満ちた瞳で、遊夜を凝視している。

拳を強く握り締め信濃^{しなの}錬^{れん}は宣言した。

「やっと見つけたぞ……大和遊夜……貴様をこのアカデミアからいられなくしてやる」

第五話 Eせ・HEROVS真治（後書き）

次回の更新や他の話の訂正が、文化祭の都合で遅れる可能性があります。

一応、自分が次回を更新する予定日は2011年、11月13日です。

第六話 錬との対決、レッドアイズの夢（前書き）

予想以上に更新が遅れてしまいました。誠に申し訳ございません。本日、両親から受験に集中しなさい、と叱責を受けて、そちらについて反省しております。

次に更新、するときは来年の3月末、または4月になっていると思います。

第六話 鍊との対決、レッドアイズの夢

第六話 鍊との対決、レッドアイズの夢

不正行為……どのカードゲームでも、魔が囁くことは誰にでもある。この世界の遊夜は、それに手を汚したのである。

カードゲームの世界で不正行為は、罵声の騒ぎではない。かつてカイザー亮がスランプに陥った時やマーカーを付けた人間が大会に参加する時よりも、酷いものである。

事は六年前、遊夜らが小学三年のマジック&ウィザーズの全国大会であった。

信濃 鍊はお気に入り入りのデュエルディスクとサイレント・マジシヤンLV8を持って、大会に出場していた。

来週に転向する幼馴染が応援しているから、負けるわけにはいかない。だから全力で勝ち続けた。

しかし、準決勝で彼を倒した少年がいた。それがデュエルモンスターズの世界の大和遊夜だった。

「デュエル開始、先行は大和遊夜から!!」

審判の声と同時にデュエルディスクが展開した。しかし、鍊はモンスター召喚をする事無く敗退した。

「僕は黒竜の雛を召喚。生贄にして真紅眼の黒竜を特殊召喚し黒炎

弾を発動……君に2400ポイントダメージ、カードを一枚伏せエンドです」

手札を二枚にしながらいきなりライフを半分以下にされるとは、小学生で強いほうの錬も想定外だった。

しかし、負ける訳には行かなかった。錬は幼馴染の彼女を見る。

深呼吸してドローして次の瞬間に彼の敗北が決定した。

「僕はスタンバイフェイズに、罫カード 破壊輪を発動し真紅眼の黒竜を破壊してお互いに、真紅眼の黒竜の攻撃力2400分ダメージ。これで僕の勝ちです」

レッドアイズが爆発して、錬のライフが0と表示された。

悔しくて涙が出そうな感情を堪えながら、彼女の前に出た。彼女は「相手が強かったただだよ、全国大会で準決勝まで来れるだけ凄いや」と声をかけてくれた。

それだけでも嬉しかった。そして相手の大和遊夜の事を彼女のお父さんに聞くと、ワンキルや高速で勝つ強敵であった事を知った。

それならば錬も納得して、次に出て来た時には打倒して優勝してやと思った。

だが、彼は決勝戦で遊夜の二度目のシャッフルを目にしてやっと気付いた。彼のシャッフルは何かがおかしい。

簡単に言つと審判と対戦者に分からないようにデッキに微妙な空

洞がある。

そこに小指が挟まれていて、小指の上にある束だけをシャッフルしている。

鍊は自分のデッキでそれをやってみた。何度もデッキを溢しそうになるが、試していて気付いた。

上の束のカードを少しずつデッキの一番下に送ったら、デッキの一番上のカードが変わってない。ミスが発生してずれる事があるが、あまり変化が無い。

彼は彼女と別れて家に帰った後、パソコンで手品のことを調べ始めてみる。その理由は、大和遊夜はプロ決闘者だけでなくマジシャンも目指していると聞いたからだ。

案の定、あった。だから彼は呟いた。

「……ふざけるな、」

彼女との思い出の一つにしたかったのに、それをイカサマに潰された事に彼は激怒した。

それが信濃　鍊が大和遊夜に復讐したい理由だ。

リングに俺は立って懐かしい顔を見つけた。

クロノス教諭の説明の後に、俺はある意味安心した。元の世界での友人、鍊と戦う事になるとは……実に想定外だった。

鍊と俺は入学式の際にフレンドとなった仲である、しかし妙だ……、いつになく奴の視線が恐ろしい。

こつちの世界じゃまだ会った事が無いのか、それともコツチの俺がバカやらかしたか……、ま、いいや。

「お互い全力でやるか、鍊」

すると鍊は俺に向けて言った。

「貴様に名前で呼ばれる筋合いは無い。それと俺と戦うなら真紅眼レッドアイズを使い、貴様の本性を暴いてやる」

はてしなく嫌な予感がするが、良いだろう。いくぞレッドアイズ、

俺はあのファンデッキにレッドアイズを加えてシャッフルする時に、鍊は鋭い視線で俺のシャッフルを見据えて、言った。

「一枚だけなら認めてやる。恐らく真紅眼の黒竜が来るんだろう？」

カードを五枚引いたタイミングで俺は、手札を落としかけた。何故ばれた、いやどうして気付けた？

見習いといえども、技術を知らない一般人なら気付くはずがない、これを一発で分かるなら海馬社長の家臣である磯野さんなどの審判レベルだ。

不気味の感覚が漂いながらも、俺は平静を保つ。年貢の納め時、
というかこれが暴かれる時が来たのかと思う。

「「決闘！！」」

「先行は俺だ。サイレント・マジシャンLV4を攻撃表示で召喚、
更にレベルアップを発動し進化させる降臨せよ、LV8よ！！」

アテムVS遊戯で最後に終止符を打った魔術師が進化して、相手
の魔法効果を受け付けなくなった姿に変わった。

幼き顔立ちから、すぐさま彼女は美しき白き姿へと変わった。ソ
リッド・ビジョンなはずなのに姿は本物の人間に見える。

「更にカードを一枚伏せてターン終了だ」

信濃 錬……サイレント・マジシャンLV8、伏せカード一枚、
手札三枚。

俺はデッキからカードを引き抜いた。

手札を確認しながら何度も思うよ、ライティング・ボルテクスが
使えなくなつたよ、と。

そんな事で悩んでる暇は無いので俺は手札からモンスターを引き

抜いた。

「俺はダブル・コストーンを守備表示で召喚して、カードを二枚伏せてターン終了だ」

大和遊夜……ダブル・コストーン、伏せカード二枚、手札三枚。

「だが貴様のエンドフェイズに伏せカードを発動する、王宮のお触れだ」

お前の使えるカードはねえよ、と言うかの如く開かれた罨カード。鍊の顔は狩人のような顔をしている。

そんな事より、やべーって！！魔法は何とか発動できても、ミラーフォースとモンスターBOXが使用不可になったじゃねえか！！

このデッキに大嵐は入っていない。海馬が使う大嵐なぞ、使うものか！！というノリで抜いたのがここで響くとは……。

ぐぬぬうううう、と考えていたら鍊が口を開いた。

「……大和遊夜……覚えているか？六年前の全国大会を、まあ貴様が覚えているとは思ってないがな」

本当に不気味に歪んだ顔で言ってきた鍊、それは遊星と対峙した鬼柳と非常に良く似ている。

「なんの話だ？俺は知らないぞ」

全く持つて俺は、この世界にいた過去の俺を知らん。コッチの大和遊夜の罪を押し付けられるのは嫌だぞ。

だが目の前の敵は借金の取り立てるように、叫んだ。

「貴様がしたデッサンチまで忘れたとは言わさんぞ!! この決闘者の風上にも置けぬ詐欺師が!!!」

その声はどこまで響いたであろうか？ 最低でも今、実技を行っている生徒の手は止まった。

静寂が闘技場全てに包み込むが……錬はお構い無しに続けた。

「公式で貴様が行った全ての試合を見ても、貴様は一度たりとも不正行為をしていない試合など無かった!!」

その言葉が発せられてから観客席にいた人間がざわつき始める、そして俺の悪い予感は的中していた事に俺は押し黙った。

クロノス教諭が慌てながら、

「い、い、い、いきなり何を言ってるノーね!! セニョール遊夜が君に何をしたノーね!!」

不適に笑いながら錬は続けた。

「先生がアイツの本性を知らないのを忘れていました、いいでしょ

う……奴の事を先生に、いやこの場にいる決闘者、全員に教えてやる……」

そして奴は俺が犯した事を断罪する如く語り始めた。

「あのバカ遊夜……だから言ったのに、」

美優の呟きに真治が驚いた。まさか知っているとは思ってなかった。

真治の反応に対して白也は、

「やっぱ知っていたんですね……彼を毛嫌いしていた理由は“これ”ですか？」

「バカはアンタ達に愚痴っていたの？」

しかし龍崎は「いえいえ元から知っていましたから」と、どこかの貴族みたいな台詞を言った。

すると真治が、

「どうするんだよ白也、止めに入るか？　いくらあの人でも今は餓鬼^きだって本人言っていたし……」

しかし龍崎白也は、そんな事をしなくても大丈夫、と言った。

これで彼が、どういう人間かがハッキリするし、何よりにこういう時に精霊が顕現けんげんすることが多い。

世界の命運を賭けた戦いで無くとも、彼らは現れる。本当にカードを信じられる人間なら、

彼らは運命を開くことの出来る人間なら少なくとも出てくる、その人間に付いて来る人間達と一緒に、

耳鳴りのように俺に届く言葉の殆どが罵声だ。中には殴り込みもうとしている奴もいる。

こんな事は分かっていたのにな……、平行世界の俺が全て良い人生を歩んでいるとは限らないのに、

案の定、俺はこの世界の人間から拒絶された。

元々好かれる様なタイプでないことは、自分で分かっていた。人を騙して生きる技術を持っていて、人に好かれようなど矛盾しまくっている。

クロノス教諭を含めた先生達が皆を静めようと努力しているが……無理だと思つ。

決闘者がイカサマなどしてはならない。いや本当の決闘者なら力

ードを信じて、己で運命を開くだろう。

しかし俺は——それが怖くて出来ない。

この勝負……どうしようか？ サレンダーでもして退学届けを出して逃げるか？ その方が早いだろう。

失敗する事の怖さは身に染みるように知っている。GXのダークネスの時にも、あった気がするが……。

俺が金木と戦ったあの時のように、デッキの上に手を置こうとしたその時だった。

後頭部めがけて鉄拳が飛んで、俺は避けきれずに直撃した。

そして一人の女子の言葉が飛んでくる。

「アンタね、私と再戦の約束して勝手に逃げるつもり！？ アンタ言ったわよね、イカサマしなくても勝てるようになるって」

振り返ると、金木がいた。それを認知した時、時間が止まったような錯覚に陥った。

確かに俺は彼女の前で、宣言した。卑怯な方法を使わなくても、勝てるようになるって……、

——しかし、今の俺には「デッキからカードを引く勇氣も前に進む覺悟も無い」……
》。

俺は凡骨だ。いや、馬の骨の下、負け犬だ。

「今の俺には、無理だ……。怖いんだよ……。」

そんな事を呟いたら、オベリスクのゴッド・ハンド・クラッシュ
ーみたいに、金木から鉄槌が飛んできた。

鼻からエロいシーンを見た主人公の如く鼻血を流す俺。金木は美
優さんみたいに俺の胸倉を掴んで、

「アンタはどうしたいのよ!! 答えなさい遊夜、アンタは逃げた
いの!? それとも負けたいの!?」

彼女の黒曜石のような黒い瞳が、真っ直ぐに俺を見ている。

それは真剣で対象を真っ直ぐ斬るように、一個の存在として認め
ているように……、

「アンタには才能がちゃんと眠ってるのよ、何でそれに気づかない
の!? 何に臆してるの!? ちゃんと前を向いて確かめなさい!
!」

金木の言葉はクラブの監督のような言葉だった。だけれど不思議
と不快感は無く、逆に落ち着いた。

デュエルディスクを構えると、持ち方を教えるように金木が俺に
後ろから密着してきた。

「決闘を続行よ、異論は無いよね?」

そんな事を言い出した金木。錬は意外そうな目で金木を見て、

「まさか君みたいな決闘者が、そんなクズに手を貸すなんてな・・・」

味方をしてくれる人間がいて良かったな、そんな口ぶりで錬は言っただが・・・、

その言葉を聴いた金木は確かに言った。

「私はいつか決闘王になる女よ・・・、こういう人間も正しい道に導けなくて決闘王なんかなれるはずが無い!!」

その声は凜と清んでいて、悪意や邪念を感じさせないぐらい希望に満ち溢れていた。

そして連動するように皆が黙った。俺も彼女を見る、感想はめちゃくちゃかつこ良く思えた。

錬は唾でも吐き捨てるようにデッキからカードを引いた。

「お前がソイツの味方をするにしても、俺のコンボはあと少しで完成する。どうやってクズを導くんだ、腐った果実は再生しない・・・、奇跡でも起こすと言うのか、夏輝!!」

錬が言いたい事は観客の皆も同じであると、思う。実際に俺はピンチだ。

大和遊夜……ダブル・コストーン、伏せカード二枚、手札三枚（中

身は速攻力カシ、ライトニング・ボルテクスと真紅眼の黒竜）。

信濃 錬……サイレント・マジシャンLV8、王宮のお触れ一枚、手札三枚。

俺はこの場を攻略する方法は分らない。俺は最強ドローが発動した事なんて、まだ二回しかない。

更にここで神話ラーの息子である、ホルス。つまりホルスの黒炎竜LV8が出てきたら確実に負ける。

シンクロ召喚をしないこのデッキでは、ブラックローズもブリューナクも無い。

どうやって勝つんだと、内心で思っていたら金木は言った。

「……………決闘者は自分で戦うんじゃないの、分からない事はカードに訊くのよ……………」

そんな事を言われても、どうすれば良いんだ？ しかも相手ターンだし。

すると錬は死皇帝の陵墓を発動した。

「俺はライフを1000支払い、現れるホルスの黒炎竜LV6!!」

信濃 錬LP3000

大和遊夜LP4000

それは幻神獣族の中で最強のカードと似ている姿をした龍。Lv 8になると魔法カードを発動を無効化する事が出来る力を持つ龍。

金色の鱗は真紅眼の黒竜を凌駕し、その能力値も真紅眼の黒竜より上だ。

「俺はホルスで、ダブル・コストーンに攻撃だ！！ そのアンデットを焼き尽くせ！！」

黒い炎が二体で一つのお化けに襲い掛かる、しかし俺は彼女に導かれるように速攻力カシを引き抜いた。

俺の右手には彼女の手がある。それはとても天使のように温かく、歴戦の猛者のように鋭い。

「手札に存在する速攻力カシの効果を発動、その攻撃を無効にして戦闘フェイズを終了させる！！」

速攻力カシが立ち塞がりダブル・コストーンを必死に死守する。速攻力カシは、護りきると砕けるように朽ちて行った。

「ここで悪あがきか？ 鬱陶しい」

そして鍊はターンを終了した。

ここで俺の心臓は暴れ始めた、同時に手も震え始める。やはり怖い、俺はデッキからカードを引く事が怖い。

目を瞑って震えていたら、彼女の声が耳の中に入った。

「言ったでしょ、分からない事はカードに訊けて。目を閉じたままデッキの一番上のカードを触ってみて……」

彼女が俺の手をデッキの一番上に置かせた。

「良く聴きなさい……カードの声を……」

呼吸を整えて指示通り聴いてみる、しかしカードの声なんて聞けない、彼女の声しか聞こえない。

「いい、耳で聴くんじやない、心で感じるの……アンタには心強い仲間^{カード}がいるんだから……」

そんな事を言われてから俺の視界が黒から真っ白に変わった。

そこには真紅眼の黒竜が佇んでいる。真っ直ぐと俺を見ながら、立っている。

『……あ……じ……
じ……』

コイツ何て言ってる？ 耳を澄まして、真っ直ぐと真紅眼の黒竜を見る。

それは必死に何かを訴える眼で、そして何か応援してくれている眼で、俺を見てくれている。

『あるじ、立って相手を見る。あるじが、かつて己が実力で倒せなかった敵を……その手で討て』

とってもハッキリとした声。その言葉が聴こえてから、色んなモンスターが俺を包むかのように現れた。

目の前に現れた三匹の猫、ネコミミ族のカード。

『マスターには僕らがついてるよ。ぶつかる覚悟が無かったら僕は使えないんだからね』

その左隣にいる始まりの戦士、カオス・ソルジャー。

『主よ、その手で未来を開ける開闢のときだ』

そして俺の前に現れたマスター・ヒュペリオン。

『敗北にも屈せぬ、立ち向かう勇氣があるのなら我はどこまでもついて行こうぞ』

ヒュペリオンに続いて現れた上級天使のクリスティア。

『そなた自身が前を向けなければ我らは、前に進むことは出来ぬ』

風が吹き二体のモンスターが前に出てきた。

『主よ前に向く時だ、我、風帝も力を貸しますぞ』

『決闘者と精霊は共闘せねば勝利を掴めない。一人では勝つ事すら不可能だ』

最初に風帝ライザーが言って、次に神禽王アレクトールが述べた。

他にもThe splendid VENUSや翻弄するエルフ
の剣士、ブリザード・プリンセスにカチコチドラゴン、天空騎士パ
ーシアスとレインボーネオスなど、色んなモンスターがいた。

全員の共通点は、俺が元の世界でお気に入りのように使った事のあるカードだ。

そして真紅眼の黒竜が前に出てきて、

『皆の意思は同じです。後は――』

俺は最後の言葉を聴く前に、現実の世界に戻ってしまった。しかし俺の後ろで密着している金木が言った。

「あとはアンタだけなんだから、遊夜」

その時、俺は彼女が女神のように見えた。美しき勝利の女神のようにも感じた。

そして彼女は俺の体から離れて、

「引きなさい、ドロ―よ!」

俺は頷いて遊戯さんにも負けないくらい大声で言った。

「俺のターン………ドロおおおおおおお!」

来たのは思い出のブランコのカード。

「俺はダブル・コストンを生贄に召喚！！ 真紅眼の黒竜！！」

真紅の瞳は敵を見据えて、黒き一對の翼で飛翔した龍。コイツで勝つてやると努力したものだ…………。

「戦闘フェイズ、真紅眼の黒竜よ本家、黒竜の力を放て黒・炎・弾！！」

黒炎の球体が真つ直ぐホルスの黒炎竜に当たり、金色の龍は光の粒子となってバラバラに砕けた。

信濃錬LP2900

大和遊夜LP4000

「俺はこれでターンを終了する」

一安心したが、錬の場にはサイレント・マジシャンがいる、まだまだ安心できなかった。

大和遊夜…… 真紅眼の黒竜、伏せカード二枚、手札二枚。

信濃 錬…… サイレント・マジシャンLV8、王宮のお触れ一枚、手札一枚。

「真紅眼の黒竜……………いつ見ても哀れなモンスターだな、そんなクズに使う権利は無いだろう」

その言葉に俺は何も言わなかったが、真紅眼の黒竜の形相が恐ろ

しくなり鍊を睨んでいる。

俺は真紅眼の黒竜が怒り心頭になる前に、心を落ち着けて言った。

「早くしろよ。こっちの相棒は本気でキレかけてんだ」

「信用性の無い言葉だな……、イカサマしか出来ない能無しが言っても誰も信じてはくれないぞ」

その言葉が闘技場に響いた時、真紅眼の黒竜は獅子のように吼えた。

それはジャックがスカーレットを出す瞬間に吼えた時のようでもある。

荒ぶる殺気を鍊にぶつけ、周りの人間でなく他の精霊も押し退かせるような威圧が流れ出ていた。

コイツの後ろにいる俺ですら臆する迫力がある。

「まあ良い、俺は天よりの宝札を発動しお互いに手札が六枚になるようにドローする。俺は五枚、貴様は四枚だ」

俺達はデッキに手をかけて高らかに叫んだ。

「ドロー……！」

引いたカードを確認すると、黒・炎・弾のカードがあった。だけ

れども500ポイント削らなければならない。

何とかしないと、ライフが先に0になり負けるのは鍊ではなく、確実に俺だ。

「俺はホルスの黒炎竜Lv4を召喚して装備魔法 巨大化を装備させる！！」

幼きホルスの黒炎竜は巨大化して、Lv8にも届く大きさに巨大化した。その攻撃力は3200だ。

「行くぞ、ホルスの黒炎竜で攻撃！！ 真紅眼の黒竜よ碎け散れ！！」

ホルスの裁きの炎が真紅眼の黒竜に襲い掛かる、そして真紅眼の黒竜の声が聞こえた。

『主、クリボーを使え』

そして俺は真紅眼の黒竜に乗せられて効果を発動してしまった。

「俺はクリボーの効果を発動しダメージを………って今は駄目だろ、」

しかし時すでに遅し、サイレント・マジシャンの3500の攻撃で俺のライフは500まで下げられた。

信濃鍊LP2900

大和遊夜LP500

くそ、完全にプレイングミスだ。向こうの世界でもこんな感じにやられていたな……。

本当にあの頃が懐かしい。そして俺は後ろを見た。

そこには金木が対戦相手を見る、と言わんばかりに指示を飛ばす。しかし、ずっと彼女を見ていたい……。そんな気持ちも芽生えていた。

前を向き直すと、鍊はターンを終了した。

俺はゆっくりと場を見て状況を良く見直してみる。

大和遊夜……伏せカード二枚、手札五枚。

信濃 鍊……サイレント・マジシャンLV8、ホルスの黒炎竜LV4（巨大化装備）王宮のお触れ一枚、手札四枚。

思い出のブランコで真紅眼の黒竜を蘇らせて、黒・炎・弾とアイツのLPを500以上削れるカードがあれば勝てるのだ。

今、ホルスの黒炎竜は巨大化の反動で弱体化している。攻撃力は800、攻撃力1300以上のモンスターを俺が引けば勝ちなのだ。

この好機を逃す訳にはいかない。天よりの宝札を鍊が発動してくれなかったら、本当に俺は負けている。

それでも攻撃力1300以上のモンスターを引けなかったのは、俺の運が悪い所為か？

そこで俺は気づいた。いつもならこういう状況になったら、臆してカードを持つのも出来ないのに、

今は．．．．．いつもとは違う、胸の高鳴りを感じる。

デュエルが楽しく感じられる、変わった感覚。主人公たちはこの感覚を感じていたのかな、と思う。

だから、俺は今感じたことを、精霊達に．．．．．いや、皆に伝える。受け入れられるかは、別としても。

「鍊、良く聞け。俺は確かにイカサマをした．．．．．、その技術でアンティールもして、カードを奪った事もある」

この宣言で先生たちの中には驚きすぎて、ふらついている人もいた。それにも構わず、俺は続けた。

「俺は遊戯さんや城之内さん、十代さんみたいな決闘者になれない事は最初っから分かっていた」

もちろん遊星や遊馬みたいな主人公にもなれない、事も最初から知っている。

そんな俺でも一つだけ分かる事がある。

「俺は彼らのようにはなれないけど．．．．．俺は彼らには歩めない、別の人生を歩むことが出来る、輝くような主人公にはなれない」

くても、彼らが救えない別の誰かを救える主人公にはなれる」

比喩すれば……悪人しか殺さない殺し屋、貧しい人々を救う義賊、仲間を守る為に相手を殺した戦士。

世界には色んな英雄（主人公）がいる。間違っている方法で誰かを助けようとしている主人公もいる。

パラドックスは間違った方向に行き過ぎてしまった者なのだろう。

誰しも主人公になるチャンスはある。それを出来るか、否かはその人次第。

「俺は、変わる。そして俺は掴む、俺のターンだあ！！　ドローお
おおおおおおおおお！！」

引いたカードはE・HEROプリズマー、攻撃力1700！！

「俺はE・HEROプリズマーを通常召喚。戦闘フェイズ、ホルスの黒炎竜に攻撃だ！！」

プリズマーが放った一撃でホルスの黒炎竜は砕けた。

信濃鍊LP2000

大和遊夜LP500

そしてここで俺は切り札のカード、

「メインフェイズ2で俺は思い出のブランコを発動する、蘇れ真紅眼の黒竜！！」

黒き炎の粉塵を纏い、真紅の竜がフィールドに顕現し、彼は飛翔した。

「だがもう攻撃は出来ない、どうする気だ！！」

ゴクリと、この闘技場にいる全員が息を飲んだ。そして俺は手札から今回の最強カードを取り出す、

「・・・・・・黒・炎・弾、を発動する・・・・・・」

真紅眼の黒竜がその巨大な口を開くと、そこには真紅の球体、黒・炎・弾があつた。

「放て真紅眼の黒竜！！ この決闘に終止符を打つんだ！！」

俺が叫ぶと同時に真紅眼の黒竜は、勢い良く黒・炎・弾を鍊に向けて放った。

「なぜだ・・・・・・、なぜ俺は負ける・・・・・・なぜアイツが上に行く」

鍊はそんな事を呟いていた。そして奴のLPは0と表示された。

跪くように地面を見つめている鍊の前に俺は行った。鍊は「馬鹿にしに来たのか？」とかホザク。

俺は皮肉げに錬に言った。

「生憎、今の決闘は確実に金木がいなかったら俺は降参^{サレンダー}してた。それに、俺はまだ立派な主人公にはなってるわい」

そう言っただけ錬は錬に右手を差し出す。

「ほら、立て。手を貸してやる」

する錬は俺の手を弾いて、

「いらん。貴様に触られるなど虫唾が走るわ」

敵とみなした奴には容赦が無い性格は、元の世界の錬とそっくりだった。

だが、確実に錬が決闘をした前と後では確実に何かが違っていた。

「これだけは言っておく、次に貴様が強くなったら俺がぶっ倒す。せいぜい首を洗って待っている」

かつこ良い台詞を吐きやがって。まったく、別の意味で戦いたくなってきたじゃねえか。

だけど、この空気を壊すように奴はマイクを持って現れた。

パチパチという拍手の音と足音が響いて、ポケモンの主人公のように赤い帽子を被った、男。

『良いでしょう。カードの絆、デュエルタクティクス、その闘志を見せてくれた大和君との決闘を認めましょう』

俺の人生のターニングポイントは、序章しか告げてなかった。

第六話 錬との対決、レッドアイズの夢（後書き）

遊夜「この度は、作者の不甲斐なさに申し訳がない。また俺が詐欺師のような事を

するのが第一の原因だが……、いつかは英雄になれるよう努力している。またこの小説にアドバイスしてくれた、読者の方々、書き手側の先輩方、これを読んでくれて本当にありがたく思っている。次、投稿するときは作者が高校生になってからだ。幼い雛鳥が飛び立つ……という表現は大袈裟だが、そういう気持ちで待っていて頂けるとありがたい。それでは俺は失礼する」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9252x/>

遊戯王ブレイブ

2011年11月27日19時54分発行